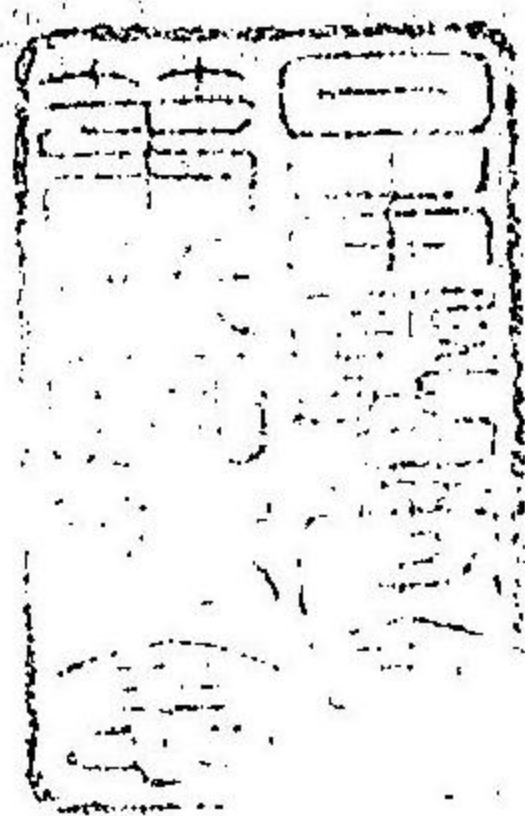
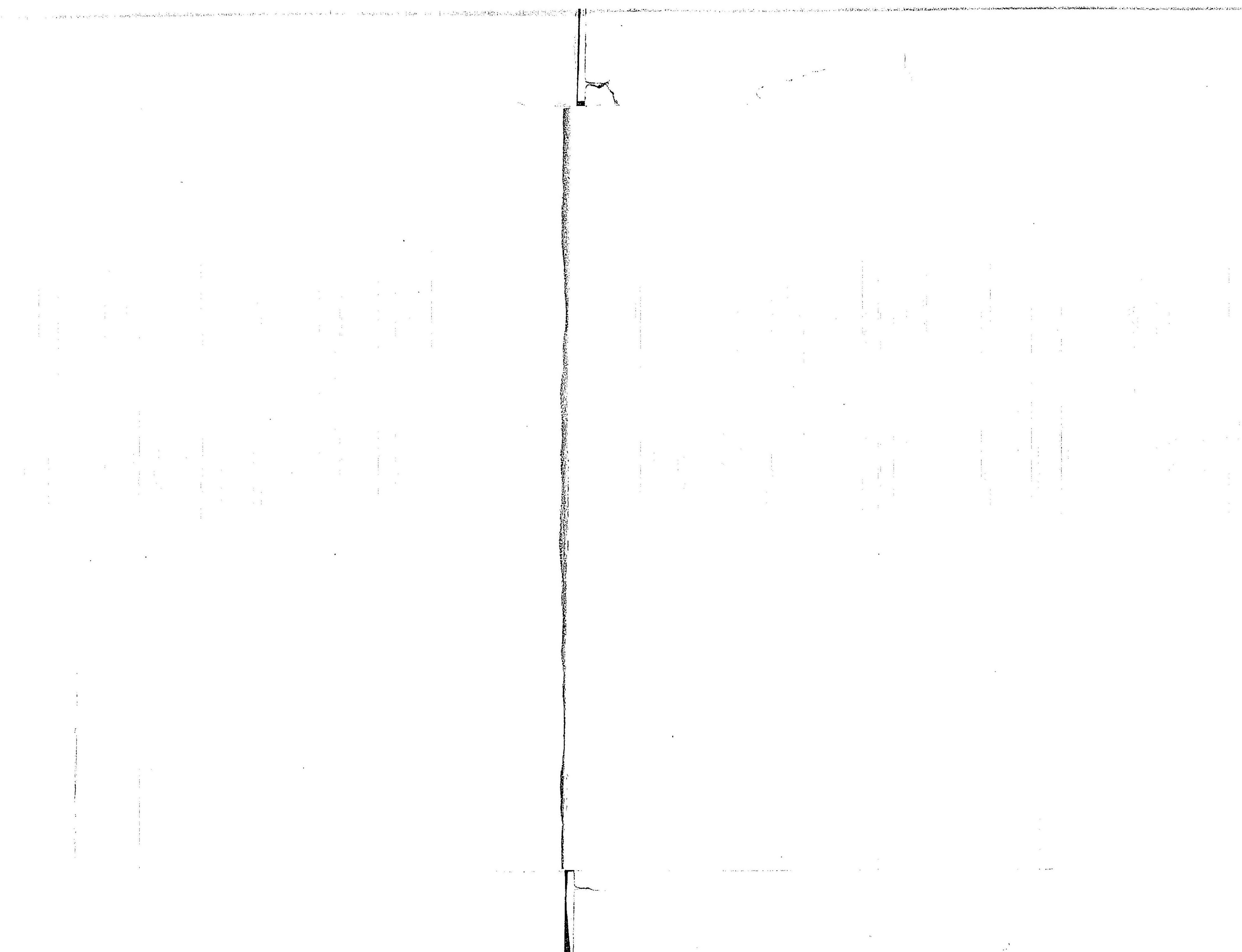


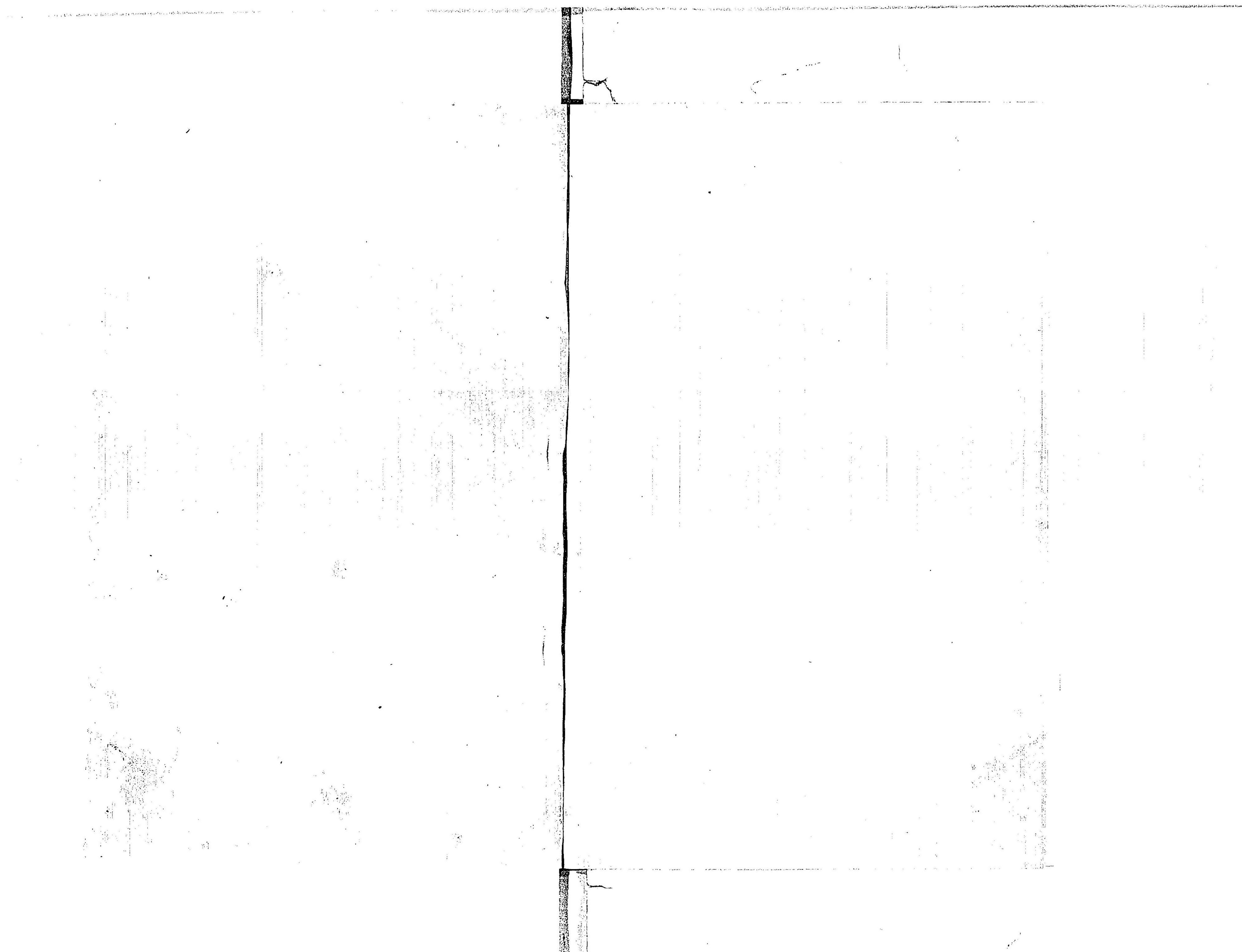
24

明治廿三年四月

蘭學事始







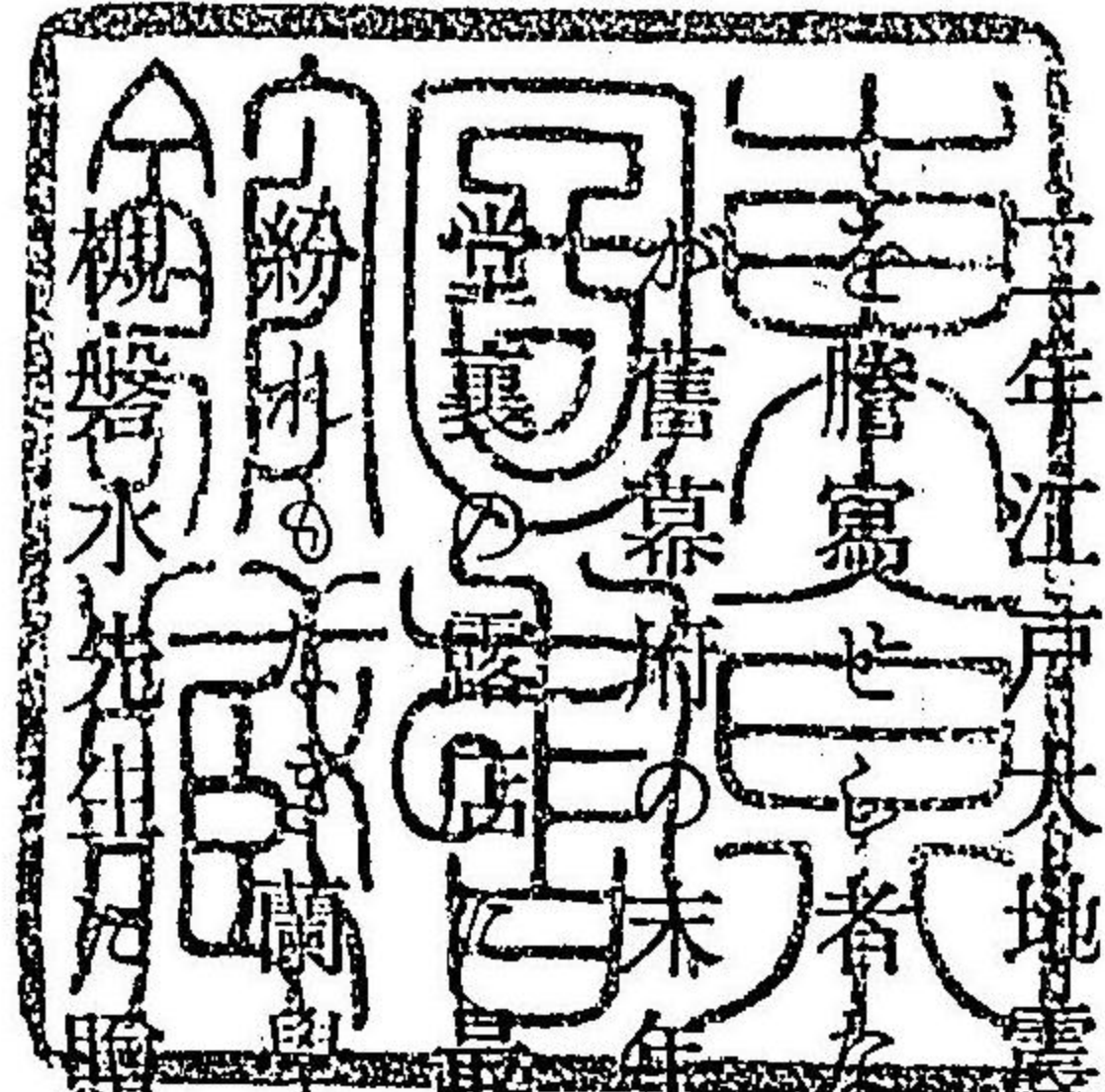
特47:
268

鸕齋杉田米生肖像



大澤實
師

V23/4/12



蘭學事始の原稿は素より杉田家に存して一本を秘藏せし
 年江戸大地震の火災に焼失して醫友又門下生の中にも
 を贖還せし者なく千載の遺憾として唯不幸を嘆するのみなり
 が舊幕府の末年に神田孝平氏が府下本郷通を散歩の折節偶ま聖
 堂裏の露店に最と古びたる寫本のあるを認め手に取りて見れば
 紛れもなき蘭學事始にして然かも鷓齋先生の親筆に係り門人大
 槻馨水先生に贈りたるものなり神田氏の雀躍想見る可し直に事
 の次第を學友同志輩に語り孰れも皆先を争ふて寫取り俄に數本
 の蘭學事始を得たる其趣は既に世に亡き人と思ひと朋友の再生
 に遭ふたるが如と而して之を再生せしめたる恩人は神田氏にと
 て我輩の共に永く忘れざる所なり書中の紀事は字々皆辛苦就中
 明和八年三月五日蘭化先生の宅にて始めてタイフルアナトミア

の書に打向ひ艦舵なき船の大海に乗出せしが如く茫洋として寄る可きなく唯あきれにあきれて居たる迄なり云々以下の一段に至りては我々は之を讀む毎に先人の苦心を察し其剛勇に驚き其誠意誠心に感ず感極りて泣かざるはなし迂老は故箕作秋坪氏と交際最も深かりしが當時彼の寫本を得て兩人對坐毎度繰返しては之を讀む右の一段に至れば共に感涙に噎びて無言に終るの常なりき斯くて一兩年を過ぎ世は王政維新の變亂と爲り都下の學友輩も諸方に散りて東西南北唯兵馬の沙汰を聞くのみ此時は當り迂老は江戸に住居し獨り目下の有様を見聞して我國文運の命脉甚だ覺束かと思ひ明治元年のとなり月日は忘れたり小川町なる杉田廉卿氏の宅を訪ひ天下騷然復た文を語る者なし然るに君が家の蘭學事始は我輩學者社會の寶書なり今是を失ふては後

世子孫我洋學の歴史を知るに由なく且は先人の千辛萬苦して我々後進の爲めにせられたる其偉業鴻恩を空ふするものなり就ては方今の騷亂中に此書を出版したりとて見る者もなかる可しと雖も一度の木に上するときには保存の道これより安全なるなし實に心細き時勢なれば賣弘などは出來ざるものと覺悟して出版然る可し其費用の如きは迂老が斯道の爲め又先人へ報恩の爲めに資く可しとて持参したる數圓金を出し懇談に及ひしかば主人も迂老の志を悦びいよく上木と決し其頃は固より活版とてはなく先づ草稿を校正して版下に廻はし櫻の版に彫刻することなれば彼れ是れ手間取り發兌は翌明治二年正月のことなりき即ち今の版本蘭學事始上下二卷是れなり爾後不幸にして廉卿氏は世を早ふせられ版本も世間に多からざ然るに今回は全國醫學會に於

て或は其再版ある可と云ふ迂老の善ひ喩へんに物なと數千部の再版書を普く天下の有志者に分布するは即ち蘭學事始の萬歲に於て管に先人の功勞を日本國中に發揚するのみならず東洋の一國たる大日本の百數十年前學者社會には既に西洋文明の胚胎するものあり今日の進歩偶然に非ずとの事實を世界萬國の人に示すに足る可と内外の士人この書を讀で單に醫學上の一小紀事とする勿れ明治二十三年四月一日後學福澤諭吉謹誌

四

祭前野杉田桂川大槻兩宇田川六先生文

明治廿三年四月一日日本醫學會第一總會ニ於テ
學祖ノ祭典ヲ舉クルニ當リ肖像遺物ヲ陳列シテ
景仰ノ意ヲ表セリ其「ターフル・アナトミア」ノ蘭書
ノ如キハ實ニ骨ヶ原ノ刑屍ニ實徵シ千歳ノ雲霧
ヲ披キタル醫學ノ起原ニシテ手澤ノ存スル所精
神如在當時發憤ノ氣象ヲ想起シ滿堂感激セサル
ハナシ蘭學事始ノ一書ハ洋文解讀ノ顛末ヨリ刻
苦研鑽ノ情狀モ詳カニ悉シタルモノナレハ永ク
會員ノ紀念ニ供セン爲メ爰ニ之ヲ再刊シテ其祭

文ヲ卷端ニ録スト云爾

二

明治廿三年四月吉日日本醫學會會員謹テ
前野蘭化杉田鷗齋桂川月池大槻磐水宇田川槐園同榛
齋六先生ノ靈ニ告ク惟ルニ大己貴少彦名ノ事邈タリ
稽フヘカラスト雖モ療病ノ方早ク此時ニ始マリ中古
ニ及ヒ軒岐ノ術三韓ヨリ入り李唐ヨリ傳ハリ其精華
ヲ採リテ之ヲ古方ニ折衷シ刀圭ノ業日ニ進ミ日本扁
鵲ノ譽ヲ異域ニ傳フルモノアルニ至レリ蓋亦盛ナリ
ト謂フヘシ保平以來兵亂相踵キ五百餘年殆ント寧歲
ナク醫術ノ如キハ僧侶巫呪ノ手ニ墮チ徳川氏治世ニ

及ヒ文運再ヒ勃興スト雖モ如何セン鎖國ノ内ニ跼蹐
シテ世界ノ事情ハ之ヲ窺フニ由ナク僅カニ支那陰陽
ノ說ヲ株守シテ各臆度ヲ逞フシ致知日新ノ學ノ如キ
ハ固ヨリ夢寐スル所ニ非ラス我蘭化先生此時ニ興リ
才八洲ノ内ニ溢レ識四瀛ノ表ニ洞リ私カニ荷蘭ノ學
ヲ修メテ醫治ニ實驗シ理學的醫學ヲ創始ス杉田大槻
宇田川ノ諸先生皆英邁俊逸ノ資ヲ抱キ麗澤講習ノ交
ヲ締シ或ハ治術ヲ以テシ或ハ譯述ヲ以テシ誓テ此學
ヲ闡明セン一ヲ期シ陋習ヲ破リ俗議ヲ排キ刻苦忍耐
日月淬勵シテ爰ニ昉メテ西洋ノ文ヲ解シ窮理ノ學ヲ

三

傳フルヲ得タリ而テ其子弟門生亦能ク其志ヲ繼キ其業ヲ擴メ特リ醫學ノミナラス兵制政治文物工藝凡ソ英米獨佛ノ書ヲ繙キ長ヲ彼國ニ取ルモノ皆其餘澤ヲ仰カサルハナシ蓋蓄フル一深キ者ハ其發スル一遠シ意フニ今日至治ノ隆盛ナル我六先生唱首ノ力大ナリト謂フヘシ嗚呼某等身ヲ醫道ニ立テ其學孫タルノ榮ヲ辱シ以テ明治ノ聖恩ニ浴ス仰テ古ヲ憶ヒ俯シテ今ヲ觀ルニ豈徒然ニシテ止ムヘケンヤ今日本醫學會組織新タニ成ル茲ニ第一回總會ヲ開クニ當リ謹テ旨酒嘉果ヲ以テ靈位ニ

薦メ聊高仰景行ノ意ヲ表ス尚饗

先生名ハ翼字ハ子鳳俗稱ハ玄白一ニ九幸ト號ス父ハ
甫仙ト云若州侯ノ醫員ニシテ母ハ蓬田ヲモキ玄孝ノ女ナリ
先生誕レシ時其母難産ニテ分娩ノ後終ニ絶命ニ及ヘ
リ傍人皆ナ産婦ノ暈倒ヲ救ハムトテ初生兒ノ事ニ及
ハズ且ツ難産ニテ分娩セル兒ナレハ定メテ死セル者
ナラントテ布片ニ包ミ之ヲ聲側ニ置ケリ然シテ後之
ヲ顧ルニ全命ナリ且ツ男兒ナリケレバ人々再ヒ愁眉
ヲ開キ乳哺養育シテ漸ク成長ニ至レリ甫メ十七八歳
ノ時牛山若州邸内父ノ膝下ニ在リテ之ニ告テ曰ク不
肖男此齡ニ至ルマテ疎慢ニ日ヲ消セリ願クハ今ヨリ

新ニ良師ヲ求メ本業ヲ習學セント大人欣然トシテ曰ク余汝ガ其言ノ出ツルヲ待テリト此ニ於テ當時二本榎ニ住セル官醫西玄哲ト云ヘル人外科ニ名アリケレハ乃チ其門ニ入り從學シ日々怠慢ナク風雨ヲ厭ハズシテ遠路ヲ往來セリ又本郷ニ俗稱官瀨三郎右衛門ト云テ龍門先生ト號セル儒人アリ乃チ其人ニ從ヒテ經史ヲ學ヒ之ヲ研精セリ二十五歳ニシテ侯ヨリ部屋住料五人口ヲ賜リケレハ此時大人ニ乞フテ外宅セリ且ツ月俸五人口ヲ以テ父ノ給ヲ待ツヘカラスト約シ遂ニ願文ヲ呈シ許允ヲ得テ日本橋通四丁目ニ偶居セリ

二

畫工楠本雲漢ノ鄰家ナリシト云爾後箔屋町堀留町等ニ轉居セリ是レ火災ニ遭ヒシガ故ナリト云三十七歳ノ時父甫仙君没シ給ヒケレバ此時ヨリ新大橋ノ中邸ニ住居シテ蘭學創始ノ擧アリ四十四歳ニテ再ヒ濱町竹本藤兵衛ト云フ士人ノ地ヲ借リ之ニ外宅セリ是ヨリ家學ヲ全備セシメントシ奕世傳來ノ和蘭瘍科ト唱フル書ヲ檢點スルニ何レモ被邦人ヨリ譯官ヲ以テ聞出セル者ノミニシテ取ルニ足ラズ又漢土ノ外科書ヲ遍ク涉獵スルニ疎漏ニシテ何レニ適從センコトヲ知ラス是ニ因テ新ニ日本一派ノ外科ヲ創建セント思惟

三

四
シ漢土ノ書籍中外科ニ係ル確言要語ヲ逐一撰集セン
一ヲ同藩ノ一奇士青野小左衛門ト云フ人ニ語りケレ
バ士其本業ニ切ナルヲ感賞シテ其撰書今如何程成レ
リヤト問フ否ナ未タ其草ヲ起サス唯志ヲ發セシ迄ナ
リト云ヒシニ士大ニ之ヲ勵マシテ曰ク足下既ニ斯ル
大業ヲ起サントシ何ヲ以テ猶豫シ給フヤ是レ明日ヲ
期スベキ一ニアラズ宜シク今日ヨリ筆ヲ把リ給ヘト
其言ニ深ク服シテ即夜ヨリ業ヲ始メ瘍科大成ト題セ
ル書數卷ヲ撰集セリ其後和蘭原書内景圖ヲ見テ臟腑
筋脉ノ漢說ト大ニ異ナルヲ疑ヒ刑屍ヲ解剖シテ之ヲ

其圖ニ徵スルニ其膠合符節ヲ合ハスカ如キニ驚キ之
ニ心服シ遂ニ憤然トシテ洋書翻譯ノ業ニ從事シ此學
ヲ首唱シ給ヒケレハ其名海外ニ轟キ治ヲ請フ者門前
ニ市ヲナシ晩年ニ及ンテ

台府ニ拝謁ヲ許サレ八十五歳ニシテ館ヲ捐テ給フ

右ハ盤水大槻先生ノ筆紀シ置レシヲ其マ、寫出シ
テ以テ序文ニ代フ

明治二己巳年正月望

不肖曾孫杉田擴玄端謹識

蘭學事始序

是書ハ吾四世ノ祖鷗齋先生ノ遺編ナリ粵ニ先生ノ時
ヲ稽ルニ世ノ士君子耳目ノ及ブ所未タ遠カラス縱ヒ
博雅ノ人ト雖モ口ヲ開キ譚ズル所ハ惟唐笠ノミニシ
テ曾テ泰西ニ渉ル者ナシ偶々一二之ニ渉ル者アルト
モ僅ニ常言瑣語ニ通シテ止ミ與旨ヲ發シ以テ實用ニ
施スヲ聞カス先生英邁ノ資ヲ以テ超然流俗ヲ抜キ二
三子ト謀リ首トシテ泰西ノ學ヲ唱ヘ嚆嚮ノ書ヲ繕キ
專志研究實ニ畢生ノ全力ヲ盡セリ遂ニ前哲未曉ノ學
ヲ啓シ千古未洩ノ奇ヲ闢シ二三子ト共ニ此學ノ鼻祖

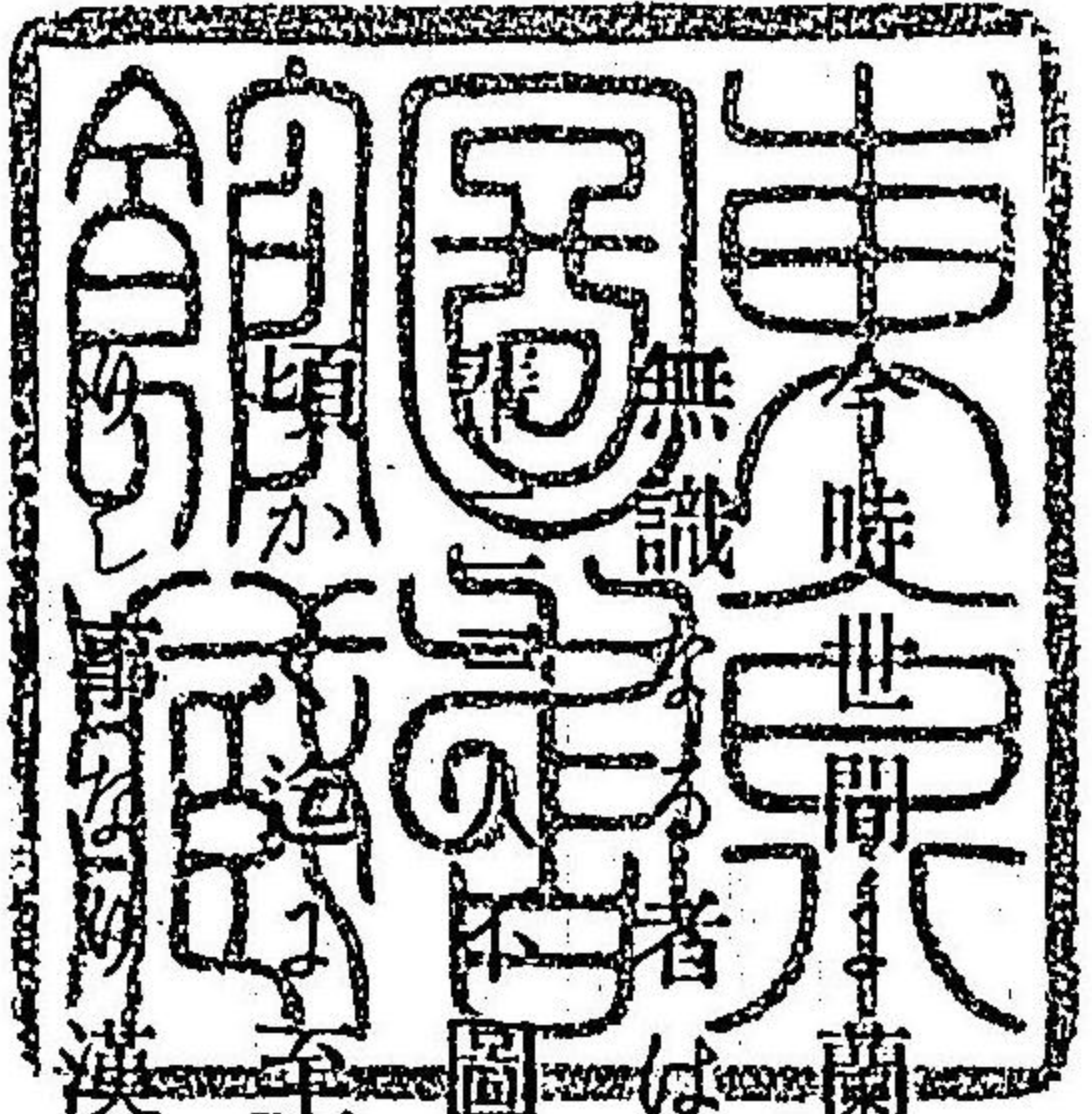
トハ爲リニキ爾來諸名哲其緒ヲ繼キ學規漸ク拓ケ次
二 二
テ近今泰西諸國本邦ト通好セシヨリ諸般ノ學科一時
ニ勃興シ諸國ノ載籍所在アラサルハ無ク殆ト戸學人
習ノ盛ニ至レリ嗚呼今ノ學ヲ爲シ易キ此ノ如クナル
モ溯リテ先生ノ古ヲ見レハ彼ノコトク難キナリ抑天
下ノ事皆ナ最勤苦ヲ歷ルノ後ニシテ始テ簡易ヲ得レ
ハ今ノ學ヲ爲シ易キ此ノ如キモ畢竟先生輩ノ賜ニア
ラスト云フヲ得ズ是書ハ只先生ノ漫筆ナレト古人苦
心ノ一斑ヲ窺フベケレハ或ハ懦夫ノ志ヲ立テント思
ヒ且ツ祖先ノ功勞ヲ没セサルハ子孫ノ務メナリト思

フテ茲ニ刊行シヌ

明治二己巳年孟春

四世孫杉田鵠廉卿謹撰

蘭學事始



今時世間 蘭學といふ事専ら行はき志を立つる人は篤く學ひ
無識なる者は 漫りおこれと誇張す其初を顧み思ふに昔と翁か
頃か 此業は志を興せし事なるかはや五十年も近し今
の 邁の僧侶かとを渡さき直し彼國人お從ひ學ひせ歸朝の後貴賤
 上下へ教導の爲めになし給ひし事おれは漸く盛んなりし尤
 の事なり此蘭學の左様の事も非ず然るまかく成り行はは
 かと思ふし夫醫家の事は其教へ方摠て實お就くを以て先と



する事ゆへ却て領會するを速かなるか又ハ事の新奇よして異方妙術も有るとの様ハ世人も覺居る故奸猾の徒これぞ名として名を釣り利を射る爲ハ流布するものなるかつらく古今の形勢を考るに天正慶長の頃西洋の人漸く我西鄙ハ船を渡せしハ陽にハ交易陰ハは欲する所有てあるへし故ハ其災起りしを國初以來甚々嚴禁なり給へりと見へたりこれ世ハ知る處あり其邪教の事は知らざる所の他事おれは論かゝ但し其頃の船ハ乘來りし醫者の傳來を受ふる外科の流法は世ハ殘るも有りこれ世に南蠻流とは云ふなり其前後より阿蘭陀船は御免有て肥前平戸へ船を寄せぬ異船御禁止ハなりし頃も此國は其黨類ハは非る次第ありて引續き渡來を許され給へり夫より三十三ヶ年目まで長崎出島の南蠻人を逐ひ拂はれて其跡へ居を移せし

よし夫よりは年々長崎の津に船を來す事との成りぬこれハ寛永十八年の事なるよし其後其船ハ隨從し來る醫師に亦彼の外治の療法を傳へし者も多しとなり是を阿蘭陀流外科とは稱するなり是れ固より横文字の書籍を讀て習ひ覺し事ハも非す只其手術を見習ひ其藥法を聞書留ふる迄なり尤もこなさぬなき所の藥品多けれハ代藥がちめてを病者と取扱ひし事と知らる一其頃西流と云ふ外科の一家出來しり此家ハ其初蠻船の通詞西吉兵衛と云る者よて彼國の醫術を傳へ人に施せしハ其船の入津禁止せられて後又阿蘭陀通詞とかり其國の醫術も傳り此南蠻阿蘭陀兩流を相兼しとて其兩流と唱へしを世には西流と呼しよし其頃は至て珍しき事よて有ければ専ら行はれ其名も高かりしゆへハその後ハ官醫ハ召し出され改名して玄甫先生と

申せしよし其男宗春と申さきとは多病にて早世し給ひ家絶へ
 ことなり是を我祖甫仙翁の師家なり其後召出されし今の玄哲
 君の祖父玄哲先生ハ玄甫先生の姪の續なりとなり右の玄甫先
 生初て西洋醫流を唱へらきしより 公儀も御用ひ遊されし
 事おて阿蘭陀醫事御用よ立し始なり

一又栗崎流といへるは南蠻人の種子ありとこれハ南蠻邪宗の徒
 嚴禁となり其船の渡海も御禁制とありされとも以前ハ平戸長
 崎の地ハ彼人々雜居し妻を持ち子も有りしが後々これを吟
 味有て蠻人の種子の分ハ残らす此地を放流せられしが其中栗
 崎氏にて名ハ「ドウ」と云ふものを彼地ハ成長して其宗ハ入
 らし其國の醫事を學ひしが邪宗ハ入らざる譯を以て歸朝を許
 され召歸され長崎へ歸りし後其術を以て大ハ行きて至て上手な

りしか人々栗崎流と稱せしよし名の「ドウ」と云るは蠻語露の事
 なるよし後ハ文字を填めて道有と認しとぞ今の官醫栗崎君の
 祖なるや又別家の栗崎なるや詳ある事ハ知らざるなり吉田流
 楷林流など云るハ阿蘭陀通詞にて彼方法を學ひ一門戸を開き
 しなり

一桂川家の事ハ今の代より五世の祖甫筑先生と申せしは 文廟
 未と藩邸におはせし時召出されし御外科なり其師家ハ平戸侯
 の醫師よて嵐山甫安と申たるよしなり此甫安ハ其侯より出島
 在館の阿蘭外科ハ御託し置いて親しく學ひせ給ひしとあり此
 御家ハ平戸へ入津以來彼國の事ハ訣品有て御親しと御自山か
 る事のよし又其時代の今の如くおもなかりしハ甫筑君其頃
 幼若にて門人となり師に附添て出島へ時々參られしか専ら嵐

山の流法を傳へ給ひしとなり阿蘭陀の外科の「ダンチル」と「アル
マンス」といふ人ときけり桂川もこの大和の國の人にて森島氏
なりしか嵐山の流を汲むといふ意にて家苗と桂川と改め給ふ
となり今の桂川君の御祖父甫三と申せしは翁若かりし時常
交厚ありし御人なりし故此事語り給へるを聞置き侍りぬこれ
を世に桂川流と稱しぬる事あり

又古來「カスバル」流といふ外科有りこれは寛永二十年南部
山口浦へ漂流ありし阿蘭船の人数の内江戸へ招呼れたる
中「カスバル」某といふ外科あり三四年留置れ其療法を學せ
られし者もありしが追々長崎へ御送りのよし江戸並に長
崎までも正保の頃此「カスバル」より傳來の療方ありしを詳
なる事を知すとも後「カスバル」流と唱ふる事と申す事

や又別に「カスバル」姓の外科渡來の事もありしか此他長崎
にて吉雄流など云へるは其後渡來の蘭人より傳へ得たる
療方も有て吉雄流とも申せり其諸家の傳書といふ者共を
見るに皆膏藥油藥の法のみて委しき事なり斯の如き類
にて備らざる事のみなれども其業は漢土の外科より大に
勝り又本邦の古へより傳りたる外治より大に勝れりとい
ふべき歟其中に翁か見ざる梶林家の金瘡の書と云ふもの
なり其中に人身中に「セイメン」といへるものありこれを生
命にあつたる大切のものなりと記せり今を以て見よ是
れ「セイメン」にして神經と義譯せしものと思はる少つたか
からこれ程の事を聞書せしは此書と始とせべし

一國初より前後西洋の事にて付てはしるべきの事有て總て嚴しく

御制禁仰出されし事ゆへ渡海御免の阿蘭陀よても其通用の横
 行の文字讀と書の事ハ御禁止なるおより通詞の輩も只れた假
 名の書留等までよて口づから記憶して通辨の御用も辨せしよ
 て年月を経たり左ありし事なれハ誰一人横行の文字讀習ひ度
 といふ人もなかりしなりき然るよ萬事其時至れと自ら開け整
 ふものなるゆへよや

有徳廟の御時長崎の阿蘭通詞西善三郎吉雄幸左衛門今一人何
 某名^{ハ忘}れたりとかいふ人よ申合て談せしよ是まで通詞の家よて一
 切の御用向取扱よ彼文字といふものを知らず只暗記の詞のよ
 を以て通辨し入組たる數多の御用を渴くに辨して勤居ること
 はあまりに手薄き様なり何卒我よ斗りも横文字を習ひ彼國書
 をよよむへき事御免許を蒙りなはいかよ左あらは以來ハ萬事

よ付け事情明白よ分り御用辨よろしかるへきなり是迄の姿よ
 てハ彼國人ハ偽り欺る、事ありてもこれを糺明するの便りも
 なき事ありと三人いひ合せて此次第を申立何卒御免許なと下
 され度旨公へ願ひ奉りしに御聞届れ至極尤の願筋かりとて速
 よ御免を蒙りしとなりこれぞ阿蘭陀渡來ありて後百年餘よし
 て横文字學ふ事の始なるよとかり

一これよよりて文字を習ひ覺る事出來西善三郎等先つコンスト
 ウールドといふ辭の書を和蘭人より借り得しを三通りまで寫
 せしよし和蘭人これを見て其精力ハ感し其書を直よ西氏ハ與
 へしよし斯ありし事等自然達 上聞けると見へ和蘭書と申も
 の是まで御覽遊されし事なき者なり何なりとも一本差し出し
 候様 上意ありしよより何の書なりしよや圖入の本指出せし

に御覽遊され之の圖はかりも至て精密の者なり此内の所説を
讀得るならん亦必ず委しき要用の事あるべし江戸よても誰そ
學ひ覺へなへ然るへしこの事よて初て御醫師野呂立丈老御儒
者青木文藏殿との兩人へ蒙 仰候よしなり之より此兩人あ
の學を心かけられたり然れども毎春一度つゝ拜禮よ來る阿蘭陀
人よ付添ひ來る通詞ともより僅の滯留中間給ふ事殊あ繁雜寸
暇もあき間の事なれしとくく學ひ給ふへき様もなと數年を
重ね給ひし事なれども漸く「ソ」日「マ」月「ス」星「ヘ」メ
ル^天「ア」地「ル」メ「ン」人「ダ」龍「ラ」カ「テ」虎「ゲ」イ「ム」ホ
ム^梅「バ」竹「ム」ブ「ス」竹と云ふ位の名より彼二十五字を書習ひ給へ
る事のとまり然れども是ぞ江戸よて阿蘭陀事學ひ初めと濫觴
なりき

一 扱翁の友豊前中津侯の醫官前野良澤といへるものあり此人幼
よして孤となり其伯父淀侯の醫師宮田全澤といふ人よ養れて
成り立ちし男なり此全澤博學の人ありし天性奇人よて萬事
其好む所常人よ異なりしにより其良澤を教育せし所も又非常
なりしとなり其教よ人といふ者の世よ廢れんと思ふ藝能の學
置て末よまでも絶へざる様よと當時人のすてはてせぬ事よ
なりしをはこれを爲して世の爲よ後よ其事の殘る様よすへし
と教へられしよと如何様其教よ違ひす此良澤といへる男も天
然の奇士ありしなり専ら醫業を勵み東洞の流信して其業
を勤め遊藝あても世よすたりし一節截ひとよせんを稽古して其秘曲を極
め又をからしき猿若狂言の會ありと聞てこれも稽古よ通ひし
事もありたり如此奇を好む性なりしよより青木君の門よ入て

和蘭の横文字と其一二の國語をも習ひとなり
 一見るにその残篇を以て良澤の事と見せしむるに同藩の坂江嶋といふものや
 一日蘭書の是を借す所にてつくすふに國異に言の殊なるにわ
 へども同じく人のなりすに扱これに取付へからざる所の居たり
 しとや志ざせしに不圖青木先生此學に通し給ふを聞き遂に其
 門に入りて先生の學を識れ蘭文字略書といふ著書は是は其頃青
 木先生長崎より歸府の後の事と聞ゆ先生長崎へ行われは延
 享の頃よと思へる良澤の入門は寶曆の末明和の初年歳四十
 餘の時なりしをこれ醫師よて常人の學へる始なるべし
 一然れども其頃ハ常人の漫りに横文字を取扱ふ事ハ遠慮せし事
 なりすてに其頃本草家と呼ばれし後藤梨春といへる男和蘭事の
 見聞せしを書集め紅毛談といふ假名書の小冊を著し開板せし
 其内ハ彼二十五文字を彫り入しを何方よりの咎を受け絶板

となりたることもありしとを

一又其のち山形侯の醫師安富寄碩といふ者麴町に住たり此男長
 崎に遊學し彼地よて二十五文字を習ひ且つ其文字よていろは
 四十七文字を綴り合はせて認め貫ひ歸り人よ誇りて彼書籍も
 讀分つやうよいひ觸らせしを翁杯も珍しき事よ思ひたり同藩
 中川淳菴杯の麴町に町宅してありしか此男より阿蘭陀文字を
 初て習ひしなり
 一翁兼て良澤は和蘭の事よ志ありや否は知らず久しき事よて年
 月ハ忘れたり明和の初年の事ありしか或る年の春恒例の如く
 拜禮として蘭人江戸へ來りし時良澤翁が宅へ訪ひ來れりこれ
 より何方へ行給ふと問ひしよ今日ハ蘭人の客屋よ參り通詞よ
 逢ふて和蘭の事を聞き摸樣よより蘭語杯も問ひ尋ねんかため

なりといへり翁其頃いまた年若く客氣甚しく何事もうつり易き頃かれ願く我も同道と給れ共に尋試とたしと申ければいと易き事なりとて同道して彼客屋に行きたり其年大通詞の西善三郎と申す者参りたり良澤引合せにておかづのよし申述たるに善三郎聞てをまひ必は御無用なり夫何故となれば彼辭を習ひて理會するといふは難き事なりたとへ湯水又酒を呑といふかと問んとするに最初は手真似にて問ふより外の仕かたの酒をのむといふ事を問んとするに先づ茶碗にても持添へ注ぐ真似をして口につけて是かと問へうなづきて「デリンキ」と教ゆ是を即ちのむ事なり扱上戸と下戸とを問ふには手真似にて問ふべき仕方かと是の數を呑むと少く呑むと差別わかるなりされとも多く呑ても酒を好まざる人あり又少

くのみても好む人あり是の情の上の事をまひなすべき様なり扱其好き嗜むといふ事は「アーンテレッケン」といふなり我身通詞の家は生を幼より其事に馴居ながら其辭の意何の譯といふ事を知らず年五十に及んで此度の道中にて其意を始て解り得たり「アーン」といふ元と向ふといふ「テレッケン」といふ引事なり其向ひ引といふの向ふのものを手前へ引寄るなり酒好む上戸といふも向ふの物を手前へ引度思ふなり即ち好むの意なり又故郷を思ふも斯くいふ是又故郷と手元へ引よせ度と思ふ意あればなり彼言語を更し習ひ得んとするよの箇様は面倒なるものよして我輩常し阿蘭陀人は朝夕してすら容易し調得し難し中々江戸などよ居られて學んと思ひ給ふの不叶事なり夫故野呂青木兩君など御用にて年々此客館へ相越され一方ならず御出精なれ

なりといへり翁其頃いまた年若く客氣甚しく何事もうつり易き頃かれ願く我も同道と給れ共に尋試とたしと申けれいと易き事なりとて同道して彼客屋に行きたり其年大通詞の西善三郎と申す者参りたり良澤引合せにてあかしのよと申述たるに善三郎聞てそきの必は御無用なり夫の何故となれ彼辭を習ひて理會するといふは難き事なりたとへ湯水又酒を吞といふかと問んとするに最初は手真似にて問ふより外の仕かとのか酒をのむといふ事を問んとするに先づ茶碗にても持添へ注ぐ真似をして口につけて是かと問へうなづきて「デリンキ」と教ゆ是を即ちのむ事なり扱上戸と下戸とを問ふには手真似にて問ふべき仕方のかし是の數々吞むと少く吞みて差別わかるなりされとも多く吞ても酒を好まざる人あり又少

くのみても好む人あり是の情の上の事をまのなすべき様なき扱其好き嗜むといふ事は「アーンテレッケン」といふなり我身通詞の家は生を幼より其事に馴居ながら其辭の意何の譯といふ事を知らず年五十に及んで此度の道中にて其意を始て解し得たり「アーン」といふ元と向ふといふ「テレッケン」といふ引事なり其向ひ引といふの向ふのものを手前へ引寄るなり酒好む上戸といふも向ふの物を手前へ引度思ふなり即ち好むの意なり又故郷を思ふも斯くいふ是又故郷を手元へ引よせ度と思ふ意あればなり彼言語を更し習ひ得んとするよの箇様は面倒なるものよして我輩常は阿蘭陀人は朝夕してすら容易し調得し難し中々江戸などよ居られて學んと思ひ給ふの不叶事なり夫故野呂青木兩君など御用にて年々此客館へ相越され一方ならず御出精なれ

ともはか／＼しく御合點忝らぬなり其元も御無用の方然る
 へしと異見したり良澤の如何承りしか翁の性急の生れゆへ其
 説を尤と聞きその如く面倒なる事をなす遂る氣根のなす徒
 日月を費すは無益なる事と思ひ敢て學ぶ心なくして歸りぬ
 一其頃より世人何となく彼國持渡りのものを奇珍とし摠て其舶
 來の珍器の類を好む少しく好事ときこえし人の多くも少くも
 取聚て常よ愛せざるのなす殊よ故の相良侯當路執政の頃まで
 世の中甚た華美繁花の最中なりしより彼舶より「ウェールガ
 ラス」天氣「テルモメートル」「寒暖「ドンドルガラス」「震雷「ホクトメー
 トル」水液「軽重「ドンクルカームル」「暗室寫「トールランターレン」
 鏡現「ゾングラス」玉「ルーブル」「筒「呼遠」といへる類ひ種々の器物を
 年々持越し其餘諸種の時計千里鏡ならひは硝子細工物の類あ

けて數へかたかりしより人々其奇巧は甚た心を動し其窮理
 の微妙なるは感服し自然と毎春拜禮の蘭人在府中の其客屋は
 夥く聚るやうになりたり何れの年といふことは忘きしか明和
 四五年の間なるへしとせ甲必丹は「ヤンカランス」外科の「バブ
 ル」といふもの來りし事あり此「カランス」の博學の人「バブル」は外
 科巧者のよかり大通詞吉雄幸左衛門は専ら此「バブル」を師と
 しとりと幸左衛門後幸作號「耕牛」と云り外科に巧くなりて其名高く西
 國中國筋の人長崎へ下り其門に入る者至て多し此年も蘭人よ
 附添來れり翁夫等の事を傳へ聞ゆへ直に幸左衛門が門に入り
 り其術を學へりこれによりて日々彼客屋へ通ひたり一日右の
 「バブル」川原亢伯といへる醫生の舌痕を診ひて療治し且刺絡の
 術を施せしを見たり扱ふ手に入りたるものなりき血の飛び出

す程と預め考へこきを受るの器を余程引はなむ置たるに飛
 遊の血てうと其内に入りたりきは是れ江戸にて刺絡せし始か
 り其頃翁年若く元氣は強し滯留中の怠慢なく客館へ往來せし
 幸左衛門一珍書を出し示せりこきは去年初て持渡りし「ヘー
 ステル名^人の「シユルゼイン」^{外科}治術といふ書かりと我深く懇望して境
 樽貳拾挺を以て交易しざりと語れりこきを披き見るに其書説
 は一字一行も讀む事能はざきとも其諸圖を見るに和漢の書と
 は其趣大に異しして圖の精妙なるを見て心地開くへき趣も
 ありよりて暫く其書をかり受けせめて圖ばかりも摸し置へき
 と晝夜寫しかり彼在留中に其業を卒へたりこれによりて或
 は夜をこめて鶏鳴に及ひたりし事もありき
 一又年は忘れたり一春かの幸左衛門阿蘭陀附添よて叅府せし頃

豊前中津邸にて昌庶公の御母君御座内よて不慮に御脛を折傷
 し給ひし事あり貴人の事かれは大騒ぎにて彼是醫師と御招き
 の處幸ひに吉雄幸左衛門出府居合せ候事ゆへ直に御招きあり
 て御療治被仰付御順快ありたり此時前野良澤御手醫師の事ゆ
 へ懸合仰付らむ格別懇意となりたりこれ等蘭學の世に開くへ
 き一ツといふへし其後其主の供よて中津へ行しかは俟へ願ひ
 奉りて彼地へ下り専ら吉雄楷林等に從ひて百日斗りも逗留し
 晝夜精一に蘭語を習ひ先に青木先生より學ひし類語と題せる
 書の諸言を本として復習訂正しなほこきに足し補ひて僅に七
 百餘言を習ひ得彼國の字體文章等の事等も荒増し聞書して持
 歸りし事ありたり此時少々は蘭書も求て歸府せり是を長崎へ
 外治稽古の爲めからで彼書説學はんとて参りし人の始なり

一和蘭は醫術並に諸々の技藝にも精しき事と世にも漸く知り人氣何となく化せらるる來れり此頃よりも専ら官醫に志ある方は年々對話をいふ事と願て彼客屋へゆき療術方藥の事を聞給ひ又天文家の人も同じく其家業の事を問ひ給へり當時は其人の門人を是は同道と給へる事も自由あり左あるにより其方方の門人と唱へ出入もありたり長崎は御常法ありて猥りに旅館への出入はからぬ事あるに江戸を暫くの間事なれば自然と構もなき姿ありき其頃平賀源内といふ浪人者あり此男業は本草家にて生得て理よきとく敏才にしてよく時の人氣は叶ひし生れかりき何れの年なりし右といふ「カランス」といへる加比丹参向の時なりしか或る日彼客屋に人集り酒宴ありし時源内も其坐し列りありし「カランス」戯に一つの袋を出し此口試

とに明け給ふへしあけたる人し参らすへしといへり其口は智慧の輪ししたるものなり坐客次第に傳へさま「工夫すれば誰も開き兼たり遂に末坐の源内に至れり源内これを手し取り暫く考へ居しか乍ち口を開き出せり坐客はいふに及はず「カランス」も其才の敏捷なるに感じ直し其袋を源内に與へたりこれよりして甚た親しと厚くなり其後は度々客屋へ至り物産の事を尋問へり又ある日「カランス」一つの棋子の如き形の「スラソ」ガステーンといふ物を出し示せり源内これを見て其功用を問ひ歸り翌日別に新に一箇の物を作り出して持ち行き「カランス」に見せし「カランス」是を見てこれハ前日見せし物と同品かりといへり源内曰く示さるゝ所の品は貴國の産物か又は外國にて求め給へるものかと問ふにこれは印度の地方別意蘭と

云ふ所よて求め來れりと答ふ源内又問て曰く其國よては如何なる所よ産するものといへば「カラン」曰く其國にて傳る所は此物大蛇頭中より出る石かりといへり源内聞てそれは左様よはあるまじ是は龍骨にて作りし物なるへいと云ふ「カラン」聞ていふ天地の間に龍といふものなき物あり如何して其骨よて作るへいとといへり是よ於て源内己の故郷ある讚州小豆島より出せる大なる龍齒おつゝさる龍骨を出し示して是即ち龍骨なり本草綱目といへる漢土の書よ蛇の皮を換へ龍の骨を換ふと説けり今我示す所の「スランガステーン」此龍骨よて作れる物なりといへり「カラン」聞て大ひよ驚き益其奇才お感へりこれよよりて本草綱目を求め右の龍骨を源内より貰ひ得て歸れり其返禮として「ヨンス」トニス「禽獸譜」ドトニス「生植本草

「アンボイス」貝譜かといへる物産家よ益ある書物共を贈りたり是等の事も直對接話にて辨したる事にはあらず附き添たる内通詞部屋附かといへる者にて其情を通て辨せしことにて一字一言通知せしことにはあらず其後源内彼地へ遊歴し蘭書蘭器なとも求め來り且つ「エレキテル」といへる奇器を手に入れ歸府し其機用の事をも漸く工夫して遍く人を驚せり

一此風右の如く成り行けども西洋の事に通じたりといふ人もなかりしが只何となく此事遠慮せしこともあきやうおなりたり蘭書杯所持すること御免といふ事はなけれども問く所持する人もある風俗に移り來れり同藩の醫中川淳庵は本草を厚く好み和蘭物産の學よ志ありて田村藍水同西湖先生杯とも同志よて毎春参向せる阿蘭陀通詞共の方にも往來せり明和八年の

のどの卵の春ると覺へたり彼客屋へ至りて「ターヘル、アナトミ
ア」と「カスパリ、ス、アナトミア」といふ身体内景圖説の書二本を取
り出し來り望人あらぬゆつるへといふ者ありとて持歸り翁
は見せさりもどより一字もよむ事はならさきとも臟腑骨節こ
れまで見聞する所とは大に異なりとてこき必き實驗して圖説と
さるものと知り何となく甚と懇望し思へり且つ吾家も從來阿
蘭陀流の外科と唱ふる身おれはせめて書篋の中よもそなへ置
たきものと思へり然れども其頃は家甚た衰へてくしてこれを
求る力及ひかたかりしにより我藩の大夫岡新左衛門といへ
る人の許に持行きしかど、の次第なれば此蘭書求め度と告た
り然れども力の足らざるは是非おしと語りしは新左衛門聞
きそれは求め置て用立つものゝ用立つものならば價は上より

下し置るるへき様取計ふへといへり其時翁それは必ずおふ
といふ目當進のなけきとも是非ともは用立つものにして御目
は掛くへいと答へり傍に小倉小左衛門後青野と改むといふ男居さり
しがそれの何卒調へ遣さるへと杉田氏のこれを空くする人に
はあらそと助言したり依之いと心易く願も望の如く調ひ得た
り是れ翁の蘭書手に入りし始めなり

一 扱毎々平賀源内おとに出會し時し語り合ひの逐々見聞する所
和蘭實測究理の事共の驚入りし事はかりなり若し直に彼國書
を和解し見るならば格別の利益を得る事は必せりされども是
まで其所に志を發する人のおきは口惜き事なり何を此道と
開くの道はあるまじきや迎も江戸杯おては及ぬ事なり長崎の
通詞に託して讀み分けさせ度事なり一書よても其業成らは大

なる國益とも成るへしと只其及びがさきを嘆息せしは毎度の事なりき然れども空しくこれを慨嘆するのみにてありぬ

一然るに此節不思議は彼國解剖の書手に入りし事かれは先其圖を實物に照し見たきと思ひしに實は此學開くべきの時至りけるにや此春其書の手に入りしは不思議とも妙とも云ん可抑頃三月三日の夜と覺へたり時の町奉行曲淵甲斐守殿の家士得能万兵衛といふ男より手紙もて知らせ越せしは明日手醫師何某といへる者千住骨ヶ原にて腑分いたせるよしなり御望あらは彼方へ罷り越れよとと言文をこしたり兼て同僚小杉玄適といふもの其以前京師の山脇東洋先生の門は遊び彼地に在りし時先生の企めて觀臟の事ありし此男も從ひ行て親しく視たるも古人諸説皆空言にて信し難き事のみなり上古と九臟と稱

せり今五臟六腑の目を分ちたるは後人の杜撰なりかんといへる事の話もありし其時東洋先生臟志といふ著書をも出し給ひさり翁其書をも見し上の事なればよき折あらは翁も自ら觀臟してよと思ひ居たりし此時和蘭解剖の書も初て手に入りし事なれば照し視て何れか其實否を試むへしと喜ひ一かたからぬ幸の時至れりと彼處へ罷る心にて殊は飛揚せり扱斯る幸を得し事を獨り見るべき事にもあらず朋友の内にも家業に厚き同志の人々へは知らせ遣はし同しく視て業事の益には相互よかしたきものと思ひ量りて先同僚中川淳菴を初め某誰と知らせ遣はせし中に良澤へも知らせ越しぬり扱良澤は翁よりも齡十ばかりも長し我よりは老輩の事にてありし故相識にこそあれ常は往來も稀に交接うとかりしを醫事に志篤きは互ひに知

り合たる中なれば此一擧は漏すへき人よはあらそ先早く申通
 とたく思ひたれともさと掛りし事且つ此夜も蘭人滞留の折な
 れは彼客屋にありけるゆへ夜分よかりぬ俄に知らすへき便
 りもあし如何せんと存せしが臨時の思付にて先手紙調へ知れ
 る人の許に立寄り相謀りて本石町の木戸際に居たりし辻駕の
 者をやとひ申遣せしは明朝の事あり望あらは早天の
 淺草三谷町出口の茶屋まで御越しあるへし翁も此處まで罷越
 し待合すへしと認め置捨てて歸れと持せ遣しけり

一其翌朝とく支度整ひ彼所に至りしは良澤参り合ひ其餘の朋友
 も皆参會し出迎たり時は良澤一つの蘭書を懷中より出し披
 き示して曰くこれい是れ「ターヘル、アナトミア」といふ和蘭解剖
 の書なり先年長崎へ行きたりし時求め得て歸り家藏せしもの

なりといふこれを見れば即ち翁か此頃手に入りし蘭書と同書
 同版かり是れ誠し奇遇なりとて互ひし手をうちて感せり扱良
 澤長崎遊學の中彼地にて習得聞置しとて其書をひらきこれと
 「ロング」とて肺なりこれと「ハルト」とて心なり「マージ」といふと胃
 なり「ミルト」といふは脾なりと指し教へたり然れども漢説の圖
 おは似るへくもあらざれば誰も直し見ざる内は心中にいかん
 やと思ひしことにて有りき

一これより各打連立て骨ヶ原の設け置し觀臟の場へ至れり扱臟
 分の事は穢多の虎松といへるもの此事は功者のよしにて兼て
 約し置しよし此日も其者に刀を下さすへしと定めたるにその
 日其者俄に病氣のよしにて其祖父かりといふ老屠齡九十歳か
 りといへる者代りとして出たり健ある老者かりき彼奴は若き

より腑分けは度々手まかけ數人を解たりと語りぬその日より前迄の腑分といへるは穢多に任せ彼か某所をさして肺なりと教へこきと腎なりと切り分け示せり夫を行き視し人々看過して歸り我々は直に内景を見究めしとといひしまでの事にてありしとなり固より臟腑に其名の書記してあるものからねは屠者の指し示すを視て落着せしことにて其頃までのならひなるよしかり其日も彼老屠か彼れの此れのと指し示し心肝膽胃の外に其名なきものをさして名は知らねとも己れ若きより數人を手にかかけ解き分けしに何れの腹内を見ても此處にややうの物あり彼處に此物ありと示し見せたり圖によりて考れば後より分明を得し動血脉の二幹又小腎かどめてありたり老屠又曰只今まで腑分の度々其醫師にたに品々をさし示したれとも誰一

人某は何此は何々かりと疑れ候御方もなかりといへり良澤相俱し携ひ行し和蘭圖を照し合せ見しに一として聊り違ふ事なき品々なり古來醫經に説たる所の肺の六葉兩耳肝の左三葉右四葉などいへる分ちもなく腸胃の位置形状も大に古説と異なり官醫岡田養仙老藤本立泉老かとは其ころまで七八度も腑分し給ひし由なれとも皆千古の説と違ひしゆへ毎度々々疑惑して不審開けず其度々異状と見しものを寫し置れつらく思へは華夷人物違ありやなと著述せられし書を見たる事もありしはこれか爲なるへと扱其日の解剖事終りとても事骨骸の形とも見るへしと刑場は野さらしとなり骨共を拾ひとりてかすく見しは舊説とは相違にして只和蘭圖に差へる所なきは皆驚嘆せるのとなり

其日の刑屍は五十歳ばかりの老婦にて大罪を犯せし者の
 よし元と京都生れにてあた名を青茶婆と呼れしものとぞ
 一歸路は良澤淳庵と翁と三人同行なり途中にて語り合はば扱
 今日の実験一々驚入且おれまで心付ざるは耻べき事なり苟も
 醫の業を以て互ふ主君々々へ仕る身おして其術の基本とすへ
 き吾人の形骸の眞形とも知らず今迄一日々々と此業を勤め來
 りしは面目もあき次第なり何とぞ此實驗に本つき大凡しも身
 骸の眞理を辨へて醫をなさば此業を以て天地間も身を立るの
 申譯もあるべしと共々に嘆息せり良澤もゆに尤千萬同情の事
 ありと感しぬ其時翁申せしは何とぞ此「ターフル、アナトミア」の
 一部新たに翻譯せば身体内外の事分明を得今日療治の上の大
 益あるへしいかにもして通詞等の手をからず讀み分けたきも

のなりと語りし小良澤曰く予は年來蘭書よみ出さ度宿願あ
 れどこれに志を同うするの良友おし常々これを慨き思ふのみ
 にて日を送り各かた彌々これを欲し給はゞ我前の年長崎へ
 もゆき蘭語も少々は記憶し居れりそれを種として共々よみ掛
 るべしやといひけるを聞かれ先づ喜はしきことかり同志に
 力を戮せ給らは憤然として志を立て一精出し見申さんと答へ
 たり良澤これを聞き悦喜斜ならず然らば善はいをけといへる
 俗説もあり直に明日私宅へ會し給へかし如何やうも工夫あ
 るへしと深く契約して其日は各々宿所々々へ別れ歸りたり
 一其翌日良澤が宅に集り前日のことを語り合ひ先づ彼「ターフル、
 アナトミア」の書おうち向ひしに誠に艦艇なき船の大海に乗出
 せしか如く茫洋として寄へさなく只あされよあきれて居たる

迄なりされとも良澤と兼てより此事を心し掛け長崎迄もゆき
 蘭語並ひに章句語脈の間の事も少しは聞覺へ聞ならひと人
 いひ齡も翁などよりは十年の長たりと老輩なればこれを盟主
 と定め先生とも仰く事となしぬ翁はいまた二十五字さへ習は
 す不意し思ひ立し事なれば漸く文字を覺へ彼諸言をもち
 ひしことなり

一扱此書をよみ如何様にして筆を立へしと談し合しし迪も始よ
 り内象の事は知れかたかるべし此書の最初し仰伏全象の圖あ
 りこれは表部外象の事なり其名處の皆知れたる事なれし其圖
 と説の符號を合せ考ることの取付きやすかるへし圖の初とは
 いひかたし先つこれより筆を取り初むへしと定めたり即ち
 解體新書形骸名目篇これあり其ころは「デ」の「ヘット」の又「アルス、

ウエルケ等の助語の類も何れも何やら心し落付て辨へぬ事ゆ
 へ少しつゝは記臆せし語ありても前後一向しからぬ事はあ
 りなり譬へは眉といふものは目の上を生じたる毛なりと有る
 やうなる一句彷彿として長き日の春の一日は明らかめられす
 日暮る迄考へ詰め互しあらみ合て僅一二寸の文章一行も解し
 得る事ならぬことよて有りとなり又或る日鼻の所ありて「フルヘ
 ンド」せしものなりとあるし至りし此語を知らずこれは如
 何なる事ありてあるべきと考合しよいかにもせんやうかき其頃
 「ウールデンブック」釋辭書といふものなりしやうやく長崎より良澤
 求め歸りし簡畧なる一小冊ありしを見合はるし「フルヘヘン
 ド」の釋註木本の枝を断ちたる迹其迹「フルヘヘンド」をなし又庭
 を掃除すれば其塵土聚り「フルヘヘンド」すといふ様よと出せ

りこれは如何なる意味なるへしと又例の如くことつけ考ひ合ふに辨へ兼たり時、翁思ふに木の枝を斷りたる跡愈れば堆くなり又掃除して塵土あつまればこれもうづたかくなるなり鼻は面中、在りて堆起せるものなれば「フルヘッヘンド」は堆といふことあるへし然れば此語は堆と譯しては如何といひければ各之を聞て甚た尤なり堆と譯さは正當すへしと決定せり其時のうれしさは何にたどへんかたもなく連城の玉をも得し心地せり如此事にて推て譯語を定めり其數も次第々々に増しゆく事となり良澤のすてに覺居し譯語書き留をも増補しけるなり其中にも「シンネン」などいへる事出に至て一向に思慮の及ひがたき事精神も多かりしこれらは亦往くは可解時も出來ぬへし先づ符號を付置へしとて丸の内に十文字を引きて記し置たり其

頃不知ことをは疊十文字と名けたり毎會いろくに申合せ考へ案しても解すへらさる事あれば其苦さの餘りそれも又くつわ十文字くと申たりき然れども爲すへき事、固より人、在り成るへき、天にありの喩の如くなるへしと如此思ひを勞し精を研り辛苦せしと一ヶ月に六七會なり其定日、怠りかくわけもなくして各相集り會議して讀合ひしに實、不昧者、心とやらにて凡そ一年餘も過ぬれば譯語も漸く増し讀し隨ひ自然と彼國の事態も了解する様、後には其章句の疎き所は一日に十行も其餘も格別の苦勞、かく解し得るやうにもなりたり尤、每春、春向の通詞どもへも聞糺せし事もあり又其間、解屍の事もあり亦、獸畜を解きて見合せし事も度ることなりき一、此會業、怠らざりて勤しりし中次第に同臭の人も相加り寄りつ

どふ事なりしが各志す所ありて一様ならず翁の一たひ彼國解剖の書を得直し實驗し東西千古の差ひあることを知り明らめ治療の實用も立て世の醫家の業も發明ある種にもなしたく一日もはやく此一部を用立つ様になし見度と志を起せし事ゆへ他一望む所もかく一日會して解る處の其夜翻譯して草稿を立てそれ付きて其譯述の仕かたを種々様々考へ直せし事四年の間草稿は十一度迄認かへて板下し渡すやうになり遂し解體新書翻譯の業成就したり抑江戸まで此學を創業して腑分といひ古りしことを新し解體と譯名し且社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し我東方（ほんとう）闔州（かんとく）自然と通稱とあるも至れり是れ今時のことと隆盛となるへき最初嚆矢なり今と以て考れば是迄二百年來彼外科法は傳はりしなれども

直し彼醫書を譯するといふ事は絶てなかりしが此時の創業不可思議にも凡そ醫道の大經大本たる身體内景の書其新譯の起始とかりしは不用意を以て得る所として實に天意とやいふへし

一過きことゝたを顧るゝ未だ新書の卒業も至らざるの前し斯の如く勉勵すること兩三年も過ぎし漸々其事躰も辨るやうにかるゝ隨ひ次第小蔗を噉ふか如くよて其甘味し喰ひつきこれゝて千古の誤も解け其筋たゝかに辨へ得し事に至るの樂しく會集の期日は前日より夜の明るを待兼兒女子の祭り見よゆくの心地せり扱都下は淨華の風俗かれは他の人もこれと聞傳へ雷同して社中へ入來りしものもありたり其時の人々を思ふも遂るも遂さるも今は皆鬼籙上の人の多し嶺春泰鳥山松圓

といへる男などは頗る出精せしか今は則ち亡し同僚淳庵なども新書上木の後かりけれとも五十は満たすして世を早うせり其ころ往來せし者おて今も生残りしは翁よりいはるか歳下の人なれども弘前の醫官桐山正哲までなり又其頃此業の著實なるを知れるものは格別たへて知らざるものは大に怪しむ疑ふもの多かりき扱集り來りたる者の内にも其業のはかどくはかからずそれと突き留めもなき面倒なる事ゆへ遂に精力盡きはて又は今日の生計も逐るゝ人は其しるし見へざるに倦む且は已むを得ず中道にして廢するといへる族も多かりき又は偶志厚かりし者も多病にして事ならず早世せしも數多ありたり最初より會合ありし桂川甫周君は天性穎敏逸群の才にてありしゆへ彼文辭章句を領解し給ふ事も萬端人より早く未だ弱齡と

申社中までも未頼母敷芳しとして賞嘆したりき尤其家代々阿蘭陀流外科の官醫ある上其父甫三君は青木先生より「アベセ」二十五字とはじめ僅なからも蘭語なども傳り給ひしを聞覺へ少くは其下地もありし故にや退屈のやうすもなく會ことよは怠りかく出席したまへり

一 同盟の人々毎會右の如く寄つとるし事かくありしといへども各其志す所異かり是れ實お人の通情なり先づ第一の盟主とする所の良澤は奇異の才ゆへ此學を以て終身の業となし盡く彼言語に通達し其力を以て西洋の事跡を知り彼書籍何よても讀得たきの大望ゆへ其目的とする所康熙字典などの如き「ウールデンブック」を解了せんといふ事し深く意を用ひさりそれゆへ世間浮華の人より多く交る事を厭ひたり此學開へき天助の天性多病は良澤といふ人

唱へ此頃よりは常に閉戸して外へも出ず其君昌に人にも交
 とす情も本に怠り公の元來けり勤方と有るも事勤め告は
 心然れども務に怠り終に天日下後世民の欲する所置れ
 奉り又其業のためをなし終に天日下後世民の欲する所置れ
 り又其業のためをなし終に天日下後世民の欲する所置れ
 見ゆれば其取のむ直に任置業を勤しり彼は欲する所置れ
 たり求めらるる紙端に御印押給て與へし事へも内科書
 を其號を賜り紙端に御印押給て與へし事へも内科書
 來君侯より賜り紙端に御印押給て與へし事へも内科書
 化物なり御戯れ名給ひ高年君常化給ひ事へも内科書
 事に扱あり御戯れ名給ひ高年君常化給ひ事へも内科書
 なるに倦り御戯れ名給ひ高年君常化給ひ事へも内科書
 確乎として動かし少からず其業を勤しり彼は欲する所置れ
 又中川淳庵は兼て物産の學を好める故何ぞ此業を勤め
 海外物産をも知り明らかめたり翁はこれらとは大に違ひ始めて
 業を新製せし天の初年隔症を患て千古の譯人掛なり桂川君

さしてこれといふ目當とて見へねとも前よりいへる家柄か
 れは只何となく此事をこのみ給ひ齡は若く氣根は強し會毎あ
 來り給ひて此舉は加り給へり翁はこれらとは大に違ひ始めて觀
 臟と和蘭圖を徴して千古の差あるに驚きいかにも先此一事を
 早くあきらめ治療の用を助けたく又世醫法術發明の間おも用
 立つやうになし志のみかりければ何とそ一日も早く速く
 此一部見るべきものとあかんと心掛け此一書の譯をし其事
 成らは望足りぬと心を決し思を興せしに依て深く彼諸言を覺
 へ他事を爲すの望はなかりしなり五色の糸の亂れしは皆美な
 るものあれとも赤と黄なるとか一色は決し餘は皆きり棄る
 心よて思ひ立ちなり其節思憲するは應神帝の御時百濟の王仁
 初て漢字を傳へ書籍を持渡りてより代々の天子學生を異朝へ

遣はされ彼書を學はせ給ひ數千歳の今に至りて始めて漢人も耻さる漢學出來る程になりたるあり今首めて唱へ出せるの業何として俄に事整ふて成就すへきの道理なり只人身形體の一事千載所説の違たる所を世に示し何とぞ其大體を知らせたく思ひし迄よて他に望む所なしと一決し右よもいへる如く一日會して解せし所を其夜宿し歸りて直に翻譯し記したため置たるなり同社の人と翁か性急なるを時々笑ひしゆへ翁答へけるは凡そ丈夫は草木と共に朽へきものならずかたくは身健なりは齡は若し翁は多病よて歳も長けたり往々此道大成の時には迎も逢ひかたかるへし人の生死は預め定めかたし始めて發するものは人を制し後れて發するものは人に制せらるるといへり此故に翁は急き申すなり諸君大成の日は翁を地下の人となりて

草葉の蔭に居て見侍るへしと答ければ桂川君などは大笑ひ後には翁を縛名して草葉の蔭と呼び給へり斯ることにて年月は過行き白駒の隙過るよりも早くとかくせし間よ三四年の月日を重ね逐々世の人も聞傳へて尋來るもありしゆへ西洋所説の臟腑經絡骨節等其既に知る所を以て大凡は其眞面目を語り示せるほどにはなりたり

一 解體新書未だ上木の前なりしか奥州一ノ關の醫官建部清庵正由といへる人はるか翁か名を聞傳へて平生記を置たる疑問を送りし事あり其書を記せし事とも我業に就きては感嘆する事多くこれまで相識れる人よもあらず翁と志を同うするも千里一契なり其書よいふこれまでの阿蘭陀流外科片假名書の傳書を此術の基とするまでなるを扱ふ殘念なり世に有識の人出て

て昔は漢土まで佛經を翻譯せしおとくは阿蘭陀の書をも和解
あしたらは正眞の阿蘭陀醫流成就すへいと記せられりこれ
は其時より二十餘年前よりの懸念ときまへり實は其見解感
するも餘ありはりらすも翁其人はあさりしを抑躍し吾等の知
已千載の一奇遇なりと答書を報し夫より往復絶すして書信を
通し其縁よりて品々の事もあり門人等其書通を書きあつめ
蘭學問答と名け留り

後に子弟等藏版となしぬ和蘭醫
事問答と題せしものはこれなり

一翁は元來疎漫にして不學なるゆへ可成りし蘭説を翻譯しても
人のそやく理會し曉解するの益あるやうはなすへき力はなく
去れども人より託しては我本意も通下かしくやむおどなく拙陋
を顧みずして自ら書綴りり其中は精密の微義もあるへいと思

へる所も解しかたき所は疎漏なりと知りなからも強て解せま
惟意の達しる所はありを舉置けるのみなり譬へは京へ上ら
んと思ふには東海東山二道ある事を知り西へくへ行けは終
まは京へ上り着くといふ所を第一とせへいと其道筋を教るま
てかりと思ふ所より其荒増の大方はありを唱へ出せしかりこ
れを手初にして世醫の爲し翻譯の業を首唱せしなり素より浮
屠氏翻譯の法は辨へず殊に和蘭書翻譯といふ事は古今になき
所の最初なれば此讀み初の時にあたり細密なる所へ固より辨
すへき様もあし只幾重おも醫たるもの、先第一は臟腑内景諸
器の本然官能を知らずしては濟す何とぞ各其實を辨へて互に
治療の助あなさへやと思へるか本意はかりなり此志ゆへ此譯
をいそきて早く其大筋を人の耳にも留り解し易くなして人々

是まで心に得し醫道は比較し速し曉り得せしめんとするを第一とせり夫故なるたけ漢人稱する所の舊名を用ひて譯しあけたく思ひしなれども此名なるものと彼に呼ぶものとは相違のもの多ければ一定しむらく當惑せり彼是考へ合すれば迎も我より古をなすよとなればいつれにしても人々の曉し易きを目當として定る方と決定して或は翻譯し或は對譯し或は直譯義譯とさまざまに工夫し彼を換へ此に改め晝夜自ら打掛り古よもいへる如く草稿の十一度年は四年に満ちて漸く其業を遂けたり尤其頃は彼國俗の精密微妙の所は明了すへき事にはあらず今の如く思ひよらず開けし所より見る人はさぞ誤解のみといふへし首めて唱る時よあたりてはかかゝ後の譏りを恐るる様なる碌々たる了簡よて企事は出来ぬものなりくれくも

彼大鉢は本きて合點の行し所を譯せしめてなり梵譯の四十二章經も漸々今の一切經よ及へり是翁か其頃よりの宿志よして企望せし所なり世よ良譯といふ人なくは此道開くへからず且翁か如き素意大略の人かくは此道かく速かよ開くへからず是も亦天助あるへし

一扱右の如く一通り譯書出来たれども其頃は蘭説といふ事少くよても聞及ひ聞知る人絶てかく世に公よせし後は漢説のみ主張する人へ其精粗を辨せすおれ胡説なりと驚き怪とて見る人もなかるへしと思ひ先つ解躰約圖と云ものを開版して世よ示せり是は俗間よいふ報帖同様のものよてありたり此業江戸に三年も過しころ年々拜禮に参向する阿闍陀便にて長崎にも聞傳へ聞學といふ事江戸に大に開けしといふこと通詞家なと家に通詞迄の事にて書物讀て翻譯する杯いふ事なかりは彼

一翁か初一念よ此學今時の如く盛よかり斯く開くへとは曾て思ひよらざりしあり是れ我不才より先見の識乏しきゆへなるへし今に於てこれを顧ふに漢學の章を飾れる文ゆへ其開け遅く蘭學の實事と辭書に其まゝ記せし者ゆへ取り受けはやく開け早かりし歟又實は漢學にて人の智見開けし後に出たる事ゆへかく速かなりしか知るへからず然れども斯業の自然に開くへきの氣運よや此ころより前記せる東奥の建部氏翁には二十歳はあり長たる翁なるか不思議よ書牘の往復ありしか我答書を得て實よ狂喜管ならずと申越せし趣なれども身の老朽を如何せんとして其息亮策を我門よ入れ續ひて其門人大槻玄澤といふ男をして登せて我門よ入れたり此男の天性を見るに凡そ物を學ぶ事實地を踏されいなすことなく心よ徹底せさる事

と筆舌の上せず一鉢豪氣は薄けれどもすへて浮たる事を好す和蘭の究理學には生れ得たる才ある人なり翁其人と才とを愛し務めて誘導し後々へ直に良澤翁に託して此業を學せしに果して勉勵怠らす良澤も亦其人を知りて骨法を傳へし故程なく彼書を解する事の大概を曉れり其際同僚淳庵桂川法眼又福智山侯杯と往來して此業を講究せり又大に志を興し此上は西遊して長崎に至り直に彼通詞家に從ひ學ひ試さきよをはかりしゆへ我も良澤も喜ひ許し汝壯年行矣勉めよ其事を濟さし宿業益進むへしと慫慂せしより愈憤起して志を負笈に決したり然れども素より貧生の事なれば力の及さる事ともなり翁其志に感し専ら其力を助けんと思へども翁も其ころの生計かたく思ふ程ならねり力の及へるたけのこれを助け且つ御同學

さりし福知山侯も淺からぬ恩遇ありてやかて彼地より本
木榮之進といへる通詞家に寄宿し教を受け又彼に問ひ此謀
り油斷なく修行して歸府とさり爾後は江戸永住の人となる事
を得たり扱嘗て編集し置ける蘭學楷梯といふ書ありしを歸府
の後藏板して同志に示せり此書出後世の志あるものこれを
見て新し憤悱し志を興せしも亦少からず此人を生じ此等の書
の出る事となりしも翁か本志を天の助け給ふの一にやと思ひ
し事なり

一 此餘我門に出入せしもの、内斯業を學ひ掛りしもの多かりけ
れとも或は久しく都下に足をどゞむるをかく或は官途を羈
れ或は生計に逐れ或は病身或は天死杯と皆そのくしく事を
遂けしものなり然れとも翁かこれを發起せしより其支派

分流を生じ出せしは少からず扱安永七八年の頃長崎より荒井
庄十郎といへる男平賀源内か許し來れりこれは西善三郎か舊
との養子として政九郎といひて通詞の業を爲せし人なり社中
蘭學を興すの最初なれと翁か宅へ招き淳庵など、共「サーメ
ンスプラーク」を習ひし事もあり源内死せし後桂川家より寄食
し其業を助け又福智山侯へも出入して侯の地理學の業も加
功しと侯専ら地理學を好み給ひ庄十郎後他家に在りて森
平右衛門と改名しとさり此人江戸へ下りて聊社中を誘發せさり
しよもあらさらんか今も千古の人となれり

一 津山侯の藩醫に宇田川玄隨といへる男ありこれ元來漢學より
厚く博覽強記の人なり此業に志を興し玄澤より彼國書を
習ひ其紹介して翁と淳庵へも往來し桂川君良澤へも漸く交を

通じたり後長崎前通詞家白川侯の家臣となりし石井恆右衛門といふ人へも出入り其業大進み一書を譯し内科
 一京師に小石元俊といへる醫師あり獨嘯菴の門人にて醫事に志
 至て厚き男なり翁固より相識れる人にあらず彼れ始て解體新
 書を讀みて千古の説に差ひし所を疑ひ親ら數々觀臆して斯書
 の着實なるに感し爾來深くこれを喜ひ翁へ書信を通じて猶其
 解しかさき所を尋問せり天明五年の秋翁侯家に陪して其國に
 罷りし歸路上京せし時滯留の間日夜來て問難したり其後東
 遊し立澤か僑居を主とし在留一年に近く毎々社中と此業を討
 論せり蘭學とてハ爲されども歸京の後其塾に於て出入の諸生
 徒に解體新書を毎に講して其實法を人に示せしとこれ關西の

人を誘發せしの一ツなり

一大坂に橋本宗吉といふ男あり傘屋の紋かく事を業として老親
 を養ひ世を營めりと不學なれど生來奇才あるものゆへ土地の
 豪商ども見立て力を加へ江戸へ下して立澤か門に入れたり僅
 逗留の間出精し其大跡を學ひ歸坂の後も自ら勉めて其業大に
 進と後ハ醫師となりて益此業を唱へ從遊の人も多く漸く譯書
 をも爲し五畿七道山陽南海諸道の人を誘導し今に於けるいよ
 いよ盛なりと聞けり江戸へ來りしハ寛政の初年の事なり歸坂
 の最初右の元俊も彼か志を助けて其業を勵ましめしとなり
 一土浦侯の藩士に山村才助といふ一奇士あり其叔父市川小左衛
 門を介として翁に蘭學の事を問ふ翁其ころハ年老て此業を以
 て悉く門人立澤に託しとれハ立澤彼國文二十五字よりして教

立たり天性其才備り殊に地學とこのみ専ら其筋を專精せしが白石先生の采覽異言を増譯重訂して十三卷の書を譯撰す栗山先生の推舉によりて官へも内獻せり其餘翻譯の内旨も奉じたりとか其業も全からずして即世せり惜むへと云ふへと萬國輿地の諸説は未だ漢人の知らざる所のもの多し是れ蘭學のここに至れるの功なり

一石井恒右衛門へ長崎舊どの譯官馬田清吉といふものなりしが其家業を他人へ遜りて江戸へ來り天明の中頃白川侯の家臣となれり侯その初めを知り「ド、ニユース」本草を和解せしめ十數卷の譯説成れり其業を卒へすして是亦異客となれり稲村某といふ男取立と「ハルマ」釋辭の書へ全く此人の力に頼れり此譯書へ近來初學稽古の人々考閱の益ありといふ此人もと舊職業を

以て仕官すへととて東下せしよあらねども斯の如く隆盛の中へ來りし事ゆへ専ら此道の助けとなりたり

一桂川家の事へ前にもいへることくなり甫周君へ拔群の俊才ゆへ凡そ和蘭の事にも略通し其名聲四方に走せ尤常に其業事の起り公上にも知れし召れし事なれり時々西洋筋の事へ和解御用も命せられし趣なり其草稿其家へ有へし和蘭藥撰海上備要方杯云ふ譯説の著書ありと聞ども未だ成熟の書を見ず年いまた六十に滿すして千古の人となり給へり

一因州侯の醫師稻村三伯といふ男あり其國に在りて蘭學楷梯を見て憤發して江戸へ下り玄澤か門を叩き此業を學び後ハ「ハルマ」といふ人著せる言辭の書を石井恒右衛門に依りて譯を受け十三卷といふ和語解譯の書を編せり其始め石井へ介をな

原書も借と與へたりと其初稿ハ宇田川玄隨岡田甫説といふもの加功して時々石井か許に往來して成就せりと訂正の時に至りてハ他に力を添へしものもありとも聞けり後故ありて侯邸を退き江州海上郡の邊に浪遊し遂に名を隨鷗と改め京師に在りて専ら此業を唱へし由今はこれハ古人となれりと聞けり併し釋辭の書を企て成せしハ初學者の爲に一功といふへし

一今の宇田川玄眞初めハ安岡氏にて伊勢の人なり江戸へ出て、岡田氏を冒し上にいふ宇田川玄隨の漢學の弟子なりし由玄隨其才の周密あるを知りて蘭學に引導せんとの意ありて毎々玄隨へも噂せしことありしとなり然るに玄隨一とせ侯駕に陪して其國に至りし頃ハや養家を辭し本姓安岡に復せし時玄眞初て師命を捨て玄澤か許に來り此學を習ふ事を請ふ蘭字の書方

まてハ玄隨より習ひ受けしと見へたれハ爲し蘭言譯語の一小冊を授けて寫さしめ又彼の局方の書を讀しむ日々往來し且つ寄食の事を乞ひけれども其ころ家を支れる事ありて暫く同社嶺春泰が許に託し此頃春泰疾んで日々に篤し終に物故せり故に此後玄澤甫周君へ謀りて同所へ託して曰く此男蘭學執心にして其依る所なきを憂ふ爲しこれを取扱ひ給へらハ往々君の業を助くへきものなるを説く君直に諾してこれより同家に入塾することありぬ其際も玄澤かもと往來して譯法を問ふ事しばしばなり本と此男蘭説の實際に心酔していふ吾他も望む所なと隨意に此業の修行出来るの師塾ならハ何方へも寄宿なしたきといふ宿願なりそれゆへ桂川家へ託せしことなり然るに其ころ同家ハ官務と治業と繁多にして彼か素志を達す

ること能はざるを玄澤訴るる繁なり一日玄澤翁に此事を語る翁其頃次第専門の療術寸暇なく素業を勤むへき暇とていなき身となりたり然れども翁は素より此道に志深かりければ猶益其道を開たきの志止かたく解体新書成就の後も彼へイステル外科書の譯文を手をかけ金瘡瘡瘍の諸篇の草を起して數卷の稿の出來たりとか其頃度々の病に罹りてに傍人も諫めこれに此業勤勉の崇りをなす所かれに少間廢すへといひ尤も玄澤等もひたすら心志を放散し偏に老を養ふべし不肖といへとも其業吾これに代るべしともいひ且に次第老行く年なれの中大業遂べき氣根もなく其後今に中絶とよりけれとも其本志の已むがごとく數年の間見あたり蘭書の分大部の物といへとも力の及へる程の費へを厭す購ひ求め相應の

藏書も集りたり此學を事とせんとするもの誰にあれ其志ありても書籍乏しき時事成らざらざらと思ひ自ら讀む暇あらざとも往々子弟等にもとより志ある人借し與へて此道開くるための裨益たるべしと思ひ數十卷を藏したり扱同トく年若く此道志篤き人を見出し別に一女の妻と養子となし此業を遂させ我醫道の未だ開ずして未だ足らざる所を開きて之を補綴し諸民の疾苦を廣濟せしむるものと朝暮心かけと折なれば幸に玄真あることを喜び即ちこれを招き其志を問ふ其云ふ處玄澤が申せしと違はずよりて翁が家へ迎へ父子の契を結ひたり玄真も其意を得て深く喜び我家の藏書を自在に取扱ひ日夜怠らば學ひ勉勵一かたならずやゝもすれは夜を徹する事もあり其精力の斯くなりといへ進める事も又速にして其功昔

日に倍せり翁か喜ひも亦知るべし志かありけれとも其頃ハ年弱き時なれハ彼ハ専ら出精すれとも亦氣の移りやすき客氣盛の最中なれハ身持至て放蕩となりとほく異見をも加へたれとも愈募りて已さるにより惜むべきの才子とハ知りたれとも捨置ハ如何なる事をや仕出シ侯家の御名を汚すへき事もあるへしと老か身の其心一日も易からず已むことを得ず離縁とて長く交を絶たり

一これハよりて同社も交を通せず彼も頼と少き身となりて甚た窮厄とてありしハ去なから其好む所の業ハ廢せさりとを彼稲村なる者抔ひそかに見次せしよとなり其際稲村等我男伯立に内々謀りて藏書中内科一二部の書を備とて譯せしめなんととて其窮を凌せしといふと後に聞たり遂ハ自新とて志を改め

たりと聞たり亦其頃稻村か企と「ハルマ釋辭の書ハ彼か加功とて其業を助成せり

一二三年過後宇田川立隨病ハよりて物故せり其嗣子あきを以て弘く養子を求めたりこハ於て稻村氏仲立ちとて宇田川の家を繼せたり前にいへる如く立隨ハハ志かトかの縁もあり其なかりと後といへとも今亡父となりと人の志を繼き其身も志す所の本意を達せりといふへと爾後益々專精とて數多の譯説をも爲し醫範提綱といふものを開板と既ハ一家の事成りぬ其行ひ改り其志立ちと上マて宇田川姓も繼と事なれハ再ハ翁へも交通をゆると給れと伯立立澤等か申にまかせ然る上ハ長く惡み遠くへさハハあらずとて出入を許し故の如く相親と立眞翁ハ仕ること師父の如くなれハ翁も亦彼を見ること子の如くす

るの昔に復せり

一 玄澤へ先きよ其名夙く成りて近頃官府よりして新よ御藏和蘭の書翻譯の 台命を蒙りしよ至りぬ昔と翁か輩の假初よ企と學業なりしに今翁か世よありて顯らかにかゝる 嚴命を蒙り奉りしに冥加よもありかたく翁か宿世の願満足せりといふへと何卒生民廣濟の爲よと思ひ立ちて取付さかたき此事よ刻苦せし創業の功終よ空とからす續ひて玄眞も亦同様の 命を蒙り相俱よ此よ從事せる事となれり仰ひて感戴するに堪へざる所なり尤もこれ他よもあらむ翁か誘導せし我門の徒弟よして此盛舉よあつかれる老か身の本懐亦何をかこれよ加ん翁か高齡を錫りし天祿もありかたく當時艸葉の蔭と綽名せられし我身今もなを聖代よなからへて其全備を見せしめ給ふこと限り

なきの恩光旻天の冥感よやあらん

一 此餘玄澤玄隨玄眞か門より出と青藍の器もあるよとなれども翁か子の子の孫彦にして委とく知る所よあらず三都の間諸侯の國よ分處するも多かるへし

一 昔と長崎よて西善三郎ハ「マリーリン」の釋辭書を全部翻譯せんと企と聞とか手初迄よて事成らずと聞けり明和安永の頃よや本木榮之進といふ人一二の天文曆説の譯書有りとなり其餘ハ聞く所なし此人の弟子に志築忠次郎といへる一譯士ありき性多病にして早く其職を辭し他へ遷り本姓中野よ復して退隱し病を以て世人の交通を謝し獨學して専ら蘭書よ耽り群籍に目をさらし其中彼文科の書を講明したりとなり文化の初年吉雄六次郎馬場千之助などいふ者其門よ入りて彼屬文並よ文章法

格等の要を傳へしとなり此千之助の今の佐十郎と改名し先年臨時の御用にて江戸に召寄せられしか數年在留し當時御家人に召出され永住の人となり専ら蘭書和解の御用を勤め此學を好めるもの皆其讀法を傳ふる事となれり我子弟孫子其教を受ることかれは各々其眞法を得て正譯も成就すへし扱忠次郎は本邦和蘭通詞といへる名ありてより前後の一人なるへしとなり若し此人退隱せずして職ありてより却てかくまでには至らざるへきか是れ或は江戸にて我社の師友もなくして推て彼邦書を讀出せる事の始りしに彼人も憤發せるの爲す所歟とも思はる是亦昇平日久しく是等の事も世に開へきの氣運といふへし

一 一滴の油これを廣き池水の内に點すれは散りて滿池に及ぶとやさあるか如し其初前野良澤中川淳菴翁と三人申合せ假初

思ひ付し事五十年に近き年月を経て此學海内に及ひ其所彼所と四方に流布し年毎に譯説の書も出る様は聞けりこれは一犬實を吠れは萬犬虚を吠るの類にて其中はよきもあはきもあはるへけれともそれ姑らく申し及すかくも長命すれは今の如くは開る事を聞なりと一たびは喜び一たびは驚きぬ今此業を主張する人は是までの事を種々の聞傳へ語り傳へを誤り唱ふるも多しと見ゆれは跡先ながら覺居たりし昔語をかくは書捨ぬ一かへすくも翁は殊に喜ぶ此道開けなは千百年の後々の醫家眞術を得て生民救濟の洪益あるべしと手足舞踏雀躍し堪へざる所なり翁幸し天壽を長して此學の開けかゝりし初より自ら知りて今の斯く隆盛に至りしを見るはこれ我身は備りし幸なりとのみいふへからず伏して考るは其實は恭く太平の餘化よ

り出と所なり世に篤好厚志の人ありともなんぞ戦亂干戈の間
 ましてこれを創建と此盛舉も及ふの暇あらんや恐多くも今茲
 文化十二年乙亥ハふたらの山の 大御神二百とせの 御神忌
 にあたらせ給ふ此 大御神の天下太平は一統と給ひと御恩澤
 數ならぬ翁か輩まで加り被り奉りくまゝすゝまて 神
 徳の日の光照りそへ給ひと御徳なりとおそれかゝこと仰ま
 ても猶あまりある御事なり其卯月これを手録して玄澤大槻氏
 へ贈りぬ翁次第も老疲れぬれハ此後かゝる長事記すへとも
 覺すまた世に在るの絶筆なりと知りて書つゝけとなり跡先ま
 なる事はよきよ訂正と繕寫となへ我孫子等も見せよかゝ八
 十三齡九幸翁漫書す

蘭學事始終

近世醫事沿革

西洋傳來ノ理學的醫學ハ何レノ時代ニ於テ其端緒ヲ啓シカト云ヘハ余ハ寶曆年
 間ニ在リトス即チ蘭書ノ讀方ヲ自讀シタル蘭化前野先生ヲ以テ開祖トス古來皇
 漢ノ醫術ハ一種ノ方技ニ屬スルモノトシ姑ラク之ヲ醫學歴史ノ範圍外ニ擱キ又
 永祿年中織田信長耶蘇教ヲ信シ南蠻寺ヲ創立シタル時代ニ葡萄牙人、西班牙人等
 ノ宗徒ヨリ醫術ヲ傳ヘ南蠻流外科ト稱シ後ニ和蘭陀外科ト稱スルモノモ起リテ
 西、樺林、吉雄、栗崎等各々一家ヲ立テ、世ニ行ハレ此諸流ハ皆西洋傳來ノ醫科ニ
 ハ相違ナケレトモ矢張口傳耳聞ノ方技ニ過キザレバ余ハ直チニ之ヲ以テ我カ醫學
 ノ開祖ト謂フヲ欲セス我理學的醫學ノ鼻祖トシテ瞻仰ス可キモノハ實ニ蘭化先
 生ニ在リトス然レトモ洋學ノコトハ已ニ此以前ニ胚胎セリ徳川六代將軍ノ末々
 世子タリシキ新井白石先生其侍臣トナリ以太利人ノ薩摩ヨリ長崎ニ送ラレケル

非言語不通ナリトノ事ヲ聞キ彼レモ人ナリ豈ニ鳥語牛鳴スルモノナランヤトテ
 感憤サレ世子ノ將軍職ヲ襲クニ及ヒテ伊人ヲ江戸ニ招致シ先生ハ屢々之ト應接
 ノ遂ニ彼我ノ情ヲ通スルヲ得タリト云フ西洋紀聞、米覽異言等ノ著述ハ此頃ニ
 成リシモノナリ八代將軍ノ代ニ青木昆陽先生幕府ノ儒臣ニシテ大ニ洋學ニ志シ長
 崎ニ赴キ譯官ニ從ヒ蘭學ヲ講習シ單語四百餘言ヲ記錄シ洋字ノ發音等ヲ了解シ
 蘭學開闢ノ基ヲ爲セリ世ニ甘薯先生ト云ヘルハ此人ナリ當初織田信長ノ時代ニ
 ハ種々ノ書籍器械ヲ持渡リ理瑪竇ノ譯書等モ渡來シ西洋ノ事物盛ニ行ハレタル
 ヲナルカ(前記ノ南蠻流外科モ此
時代ヨリ行ナレタリ)其後豊臣秀吉ノ代ニハ耶蘇ヲ嚴禁シテ僧侶信徒ヲ
 殺戮放逐シ書籍器械、寺院等ヲ燒燼シ徳川氏ニ至リテモ三代將軍ノ時代ニ天學
 初函以下三十餘部ヲ禁止シタルヲアレハ(職方外記天經或問等今ニ存スルモ
ノハ禁止三十部内ノモノナリト)洋學ノ種
 子ハ此時代迄ニ殆ント消燼シタリト見ユ享保年代八代將軍ノ時始メテ洋書ヲ讀
 ムノ禁ヲ解キ天文御術モ採用セラレ前述ノ新井青木兩先生ノ發憤ハ此時代前後

ニ在リテノ事ナレハ世ニ洋學ト唱フルモノヲ形ツクラレタルハ此兩先生ノ力ナ
 リト謂フ可シ

蘭化先生(中津ノ人ニシテ
江戸ニ住ス)ハ寶曆明和ノ間ニ興リ豪邁英達ノ資ヲ以テ夙ニ洋學ニ志
 シ屢長崎ニ往來シテ譯官ニ就キ質問研究シタレハ皆洋書講讀ノ國禁ニ束縛セラ
 レ單ニ言語ヲ以テ僅カニ雙方ノ事情ヲ通ズルニ止マリ先生ノ疑ヲ解キ意ニ滿ル
 可能ハス拮据數年遂ニ其爲ス可カラザルヲ知りABC廿五文字ノ發音單語數百
 言ヲ記シ醫書、辭書、若干卷ヲ得長崎ヲ去テ江戸ニ歸リ潛思研究寢食ヲ廢スル
 六七年ニ及ヒ終ニ獨學ヲ以テ蘭書解讀ノ方ヲ自得シ初メテ翻譯ノ業ヲ成セリ杉
 田、大槻、宇田川、桂川及ヒ中川等ノ諸先生俊才明識皆其門ニ出テ社ヲ結テ講讀ヲ
 カトメ隨テ解讀スレハ隨テ翻譯シ大ニ西洋流ノ醫學ヲ振興シ所謂ユル蘭醫蘭方
 ノ名稱モ此時ニ起リ醫學各科ノ譯書モ畧備ハルニ至レリ即チ解體新書(醫書翻
譯ノ原始ナリ)瘍醫新書(以上寛政年間杉
田大槻兩先生著)内科撰要(寛政年間宇
田川槐園著)醫範提綱(文化年間宇
田川榛齋著)和

蘭藥鏡(文政年間宇田川榛齋著)名物考(上全)眼科新書(文化年間杉田立卿著)舍密開宗、植物啓源(天保年間宇田川榕庵著)氣海觀瀾(文政年間青地林宗著)等ハ其最著シキモノニシテ其他諸先生ノ翻譯ニ掲リ刊行スルモノ枚擧ニ遑アラヌ又或ハ謄寫本ニシテ世ニ傳ハルモノ或ハ刊行ヲ許サレザルモノ亦タ尠ナカラヌト云フ當時蘭書一ニ行ヲ讀ムニ一夜ノ會讀ヲ費シ二八、五十等ノ日ヲ定メテ公務治療ノ餘暇ニ其會ヲ催フサレタルコトナレハ此翻譯書ノ夥キヲ見テモ其勉強ノ尋常ナラサルヲ知ル可シ故ニ我醫學ノ鼻祖ハ前野蘭化先生ニシテ其業ヲ翼賛シテ今日ノ隆盛ヲ致シタルモノハ杉田大槻宇田川等諸先生ノ力ナリト云フ可シ此頃ヨリシテ一般ノ學徒ハ醫學ヲ脩ムルモノ、ミニシテ洋學ノ事ハ幾ント醫師持切リノ姿トナリ父子師弟各其志ヲ繼キ益々闡明ヲ力メテ怠ルコトナシ其後シーボルト氏ノ長崎ニ來ルニ及テ高野長英、伊東玄朴、竹内玄同、戸塚靜海等ノ諸先生前後從テ教ヲ受クルモノ數十人皆蔚然トシテ一大家ヲナシ此他坪井信道先生ハ東京ニ、緒方洪庵先生ハ大阪ニ、佐藤泰然先生ハ佐倉ニ、青木周

彌先生ハ長州ニ、小石、新宮兩先生ハ京師ニ藩々隨處ニ割據シテ或ハ講習ヲ力メ或ハ治術ヲ攷メ各々蘭方ヲ唱ヘテ大ニ醫學ノ勢力ヲ増シタリ其頃高島秋帆氏火技ヲ唱ヘ蘭式ノ兵學初メテ本邦ニ入りタレヒ韃鈴類ノ翻譯ニ從事セシハ醫師其人多シト云フ安政中幕府蕃書調所ヲ創立スルニ及ヒ之カ教官タルモノ杉田成卿、箕作玩甫先生以下概テ醫師ヲ以テ之ヲ組織シ其頭取職モ始メハ普通ノ事務官ナリシカ後ニハ神田孝平君、柳河春三君之ニ代ハル亦醫家出身ノ人ナリ、サレハ今日洋學ノ發達ハ蘭學ニ始マリ蘭學ノ發達ハ醫學ニ在リト謂フ可シ

以上沿革中ノ第一期トシテ前野蘭化先生蘭學解讀翻譯ノ始ヨリ杉田、大槻、桂川、中川等諸先生ノ勉強ニ由テ大ニ斯道ヲ開キタルノ概畧ニシテ寶曆、明和ノ頃ヨリ天保弘化ノ際ニ涉リ事多クハ江戸ノ事業ニ屬ス

醫學發達ノ第二期トシテ我曹ノ今日ニ紀念ス可キハ今ノ陸軍々醫總監松本順先生萬延元年長崎ニ養生所ヲ設ケ傍ラ醫學ヲ講習シタル事是ナリ先是幕府ハ海軍傳

習トシ和蘭ヨリ數名ノ教師ヲ聘シ各々其術ヲ傳習セシメタリシカ蘭醫朋百氏モ亦其數中ニ在リテ松本先生幕府ノ侍醫ヲ以テ其傳習ノ命ヲ蒙リテ其教ヲ受ク直チニ蘭人ニ親灸シテ一ニ其辨明指導ヲ受クルコトナレハ是迄一字一句ノ拾讀ミニ汲々トシ譯字名物等ノ考證穿鑿ニ日ヲ送リタルノ比ニ非ラス面命耳提毫モ遺ス處ナク年來ノ疑義誤謬モ一時ニ氷解シ頓ニ學問ノ殼率ヲ變シタリ此ニ於テ藩々有志ノ醫師ハ靡然トシ長崎ニ屬至シ其講席ニ陪スルモノ數ヲ知ラス程ナク海軍傳習ハ廢止トナリタレモ其實益ノ著明ナルト朋百氏松本先生ノ盡力トニ因テ醫學傳習ハ存スルコトナリ松本先生ハ時ノ奉行職岡部駿河守ニ謀リテ和蘭陸軍病院及ヒ私立病院ノ制ヲ參酌シ養生所ヲ設立シ其傍ヲニ講堂ヲ屬セラレタリ即チ今日ノ臨床講義ノ體ニシテ此ニ其講義ヲ聽キ又其病人ニ就テ指教ヲ受クルコトニヘ治療ニ志ス者ハ麻姑ノ爪ニテ痒ヲ搔クノ痛快ヲ覺ヘ學術共ニ大ニ長足ノ進歩ヲ爲シ讀書ノ風モ治療ノ方モ悉ク其面目ヲ改ムルニ至レリ之ヲ醫學ノ科目ヲ明

ニシ又病院ヲ設立スルノ嚆矢トス養生所ハ后チ改メテ精得館ト稱シ朋百氏期滿チテ歸國シ松本先生モ大成歸府セラレタル後ハキボート井ノ氏代リテ教師ノ任ニ就キ今ノ海軍々醫總監戸塚文海君其後任トナリ益々其業ヲ治メ又化學ノ教場ヲ開キガラタマ氏ヲ聘シテ其教師ニ充ツキボート井ノ氏歸國スルニ及ヒテマンズフエルド氏之ニ代リ竹内池田ノ兩君戸塚君ニ替リテ其頭取トナレリ予モ傳習ノ始メヨリ松本先生ノ門ニ入り朋百氏ノ講義ヲ與リ聽キ近隣ノ仕合せニハ終始引續キキボート井ノ、マンズフエルド氏ノ時ニ至ル迄傍聽ノ席末ニ連ナリシガ明治維新ノ際乏シ學頭ニ承ケマンズフエルド氏ト共ニ精得館ノ世話ヲ爲スコトナリタリ此時迄教師ノ方ニ於テハ正シク學科ニ順序ヲ逐フコトナレモ傳習方ノ人(所謂幕府ノ御醫師)ハ格別藩々ノ生徒ハ所謂ユル其相伴ニシ且ツ時々家事等ノ都合モアリテ去就常チキカ故ニ解剖ヲ知ラス生理ノ解釋ニ苦シミ病理ヲ知ラズ治療篇ニ不審ヲ抱ク等ノ奇談モアリ且當時數學ハ勿論理化學等ノ大意サヘ學ビ

タル者ナキ時代ナレバ講義ノ大半ハ矇昧ノ内ニ過キ直傳習トハ云ヘ僅カ病床日誌ノ處方ヲ筆記ノ自家日常治療ノ用ニ供スル者モ不少教師三年五年ノ盡力モ眞ニ其益ヲ受用スル者ハ僅々數名ノ直參醫師ニ過キス諸藩多數ノ醫生ハ微カニ其碎片ヲ拾フノミナリキ然レモ維新ノ世トナリテハ一視同仁生徒ノ身分ニ差別モナクナリタレハ學科ノ規程ヲ全生徒ニ履行セシメントテ精得館ヲ改メテ醫學校ト稱シ課程ノ順序就學ノ規則ヲ定メ學期中ニハ生徒ノ歸省ヲ許サズ試驗ノ法ヲ設ケ(試驗ハ四時之ヲ行ナヘリ其法ハ尋常ノ講席ニテ順番ニ問ヲ設ケ甲答ヘサレハ其問ヲ乙丙ニ移ス等極メテ簡易ナル方ナリ併シ始メテノコナルノミナラシ其席ニハ必ス長崎府知事澤三位公或ハ井上判事野村判事等臨席セラレテ晴レカ問敷席ナルヲ以テ生徒ハ嚴酷ナリトシ教師及ヒ子ニモ怨言ヲ吐キシ程ナリ今日ヨリ追想スレハ造作モナキコナレモ亦タ以テ當時ノ幼稚ナル知ル可キナリ)且ツ豫科教師ケールツ氏ヲ招聘シ數學、理學、化學、動植物學ノ大意ヲ講セシメ少年子弟ヲ募集シテ何年就學ノ證書ヲ取り入學セシムルコトナセリ各自家事ノ都合モアリ學則ノ改マリタレハトテ年來ノ習俗ハ一朝ニ變ス可キニ非サレバ眞正ニ學科ノ順序ヲ通過セシモノハ半數ニモ及ハサリシト雖モ兎ニ角學科ノ教授ニ順

序ヲ立タルハ此時ヲ創始トス

以上ハ幕府ノ末路ヨリ維新ノ始メ明治三四年ニ涉リタル醫學ノ發達ニシテ之ヲ第二期トス此第二期ノ事ハ多クハ長崎ニ於テ成立シモノナリ然レモ此間國事混雜ノ際ナルニモ尙ハラス東京ニ在テハ西洋醫學所ヲ設ケ大槻俊齋先生緒方洪庵先生相繼テ頭取トナリ坪井、島村、石井、足立、桐原等ノ諸君教授トナリ洪庵先生歿スルニ及ヒ松本先生恰モ長崎ヨリ歸リテ頭取教頭ヲ兼ネタリシカ維新ニ際シ横濱ノ陸軍病院ヲ藤堂邸ニ置キテ大病院ト稱シ英醫ウヰーリス氏ニ治療ノ事ヲ任シ右ノ醫學所ヲ收メテ之ニ屬シ尋テ岩佐、相良ノ二君校務ヲ理ムルニ及テ明治四年普國陸軍々醫正ドクトル、ミユルレル海軍々醫ドクトル、ホフマン氏ヲ聘シテ大ニ學則ヲ釐革シ其翌年即チ明治五年ニハ更ラニニ製藥學一ウエルト教授 コツヒユース理化學教授 ヒルゲンドルフ博物學教授 フオンク語學教授 氏等ヲ聘シテ科ヲ分チ程ヲ定メ教授ノ躰裁全ク備ハリ日本ノ醫科大學ノ形ヲ成セリ

爾來數多ノ小變遷ヲ以テ層々級ヲ崇メ今日ノ完全ナル大學ノ地位ニ進ミ他ノ一方ニハ陸海軍ノ軍醫部大ニ隆盛ヲ極メ其他民間ニハ赤十字病院、慈惠病院、順天堂病院、濟生學舎、同愛社、積善社等ノ設置アリ醫學各會醫事新聞、雜誌等モ世ニ行ハレ凡ソ醫事ニ關スル各種細大ノ出來事ヲ通覽スレハ我曹ノ記憶シ得タル往時ニ遡リテモ驚ク可キノ進歩ナリト云ハサルヲ得ヌ殊ニ大學ニ於テ初メハ外國人ヲ雇聘シテ各科教師ノ數ヲ具フルコトニ心配スル程ノコトナリシガ十數年ヲ出テスシテ再ヒ外人ヲ減シ日本卒業ノ學士ヲ以テ之ニ換ヘ學術ノ日ニ月ニ新ナルニ拘ハラヌ毫モ不足ヲ感スルコトナキハ其進歩ノ駿速ナル實ニ豫想外ニ出テタリト云フ可シ即チ維新前後ヨリ今日大學ノ完成ニ至ル迄ヲ第三期トシ此間ノ事業ハ重モニ東京ニテノ出來事ヲ多シトス而シテ此期ニ於テ醫學ノ發達ヲ誘進シテ全國ノ大勢ヲ一定シ復タ憾ス可カラサルニ至リタルモノハ醫術開業試驗ノ事是ナリ維新ノ始メ全國醫師ノ現員ニ就キ其履歷ヲ點檢スルニ前述ノ如ク前野杉田先生

十

以來八十年間非常ノ勉強忍耐ヲ以テ振興誘導サレタルニ拘ハラズ醫師百人中西洋醫二十一人ノ比例ニシテ他ハ皆皇漢醫流ノ方技家ナリ而シテ其西洋醫家ト稱フルモノモ正シク學科ヲ踐ミシモノ寡ナク多クハ西洋ノ藥品ヲ漢方風ニ病氣ニアテハムルニ過キス到底全國一般ニ通シ醫學ノ發達ヲ圖ルナトハ思ヒモ寄ラヌ有様ナリキ固ヨリ醫學校ニ於テハ當初ヨリ醫生ノ教育ニ怠ル所ナシト雖モ正シク醫學ヲ修ムルニハ中々容易ナラサルコトニ相應ノ才力ヲ要シ相應ノ資力ヲ要シ又十年ノ歲月ヲ要シ而シテ其年限中油斷ナク勉強ノ怠ラサル人ナラデハ卒業スルコト能ハサルナリ例ヘ其人アリトモ卒業ニ至ル迄ハ尙ホ數年ノ時日ヲ餘セル時節ナレハ目下ノ需用スラ差支ユルノ勢ナルヲ以テ先ツ向後醫師タルモノ、修ム可キ學科ヲ指示シテ其方向ヲ定メ後進子弟ヲ勸奨シテ漸次ニ醫學ノ發達ヲ圖ルノ外ナシ此ニ於テ內務省ハ明治八年ニ簡易ナル醫術試驗ノ科目ヲ定メテ東京京都大阪ノ三府ニ達シ新タニ開業ヲ乞フモノハ此試驗ヲ經テ免狀ヲ受ケシムルコトナ

十一

レリ之ヲ醫術開業試験ノ始メトス此時ノ試験法ハ七科ノ問題ヲ地方病院長等ニ於テ撰定シ試験ヲ遂ケ其筆記ニ及落ノ見込テ附シ衛生局ニ送り衛生局ハ再ヒ之ヲ検査シテ免狀ヲ授與スルノ手續ニシテ固ヨリ不完全ノ方法ナリ蓋シ當時始メテ全國ノ醫生ヲ收攬シテ正則ノ範圍ニ入ル、ノ際ナレバ他日其弊ノ生スルニ及テ改正スルコトナシ先ツ此位ノ事ニテ地方ノ適度ニ應シタル者ナラン而シテ從前ノ開業醫師ハ其儘其業ニ安セシメ一ツモ問フ所ナク其上全國一般ニ舉行スルコトナサス先ツ三府ノミニ施行セラレタルガ醫師ノ必要ハ固ヨリ各地ニ差等アルヘキコトナラス却テ邊僻ノ地方ニ於テ最緊切ナルカ故ニ地方官ニ於テハ病院ヲ設ケテ醫學ノ教場ヲ附屬シ醫師ノ改良ト普及トヲ圖カリ三府ト全シク醫師試験ノ方法ヲ實施センコトヲ内務省ニ稟請スルモノ續々踵ヲ接シ九年ニハ各地一般ニ此試験ヲ推及スルニ至レリ十一年ニハ各地方(鹿兒島ヲ除ク)醫術開業試験ヲ施サ、ルノ府縣ナク隨テ地方ノ醫學生徒ハ四千餘人ノ多キニ及ヒ各地ノ試験ニ精粗ノ差

等著シク不公平ナリトノ説モ起ルニ至リ恰モ一步ヲ進ムルノ機會ヲ得タルヲ以テ其翌年即チ明治十二年試験ノ手順ヲ進メ衛生局ニ於テ問題ヲ製シテ地方廳ニ封送シ地方廳ハ院長其他適當ノ學者ヲ以テ委員ヲ組織シ其封題ヲ開キテ試験ヲ爲スコトナセリ其後大學卒業ノ醫學士モ多クハ地方ニ位置ヲ求ムルノ勢トナリ又地方卒業ノ醫師モ漸ク其數ヲ加ヘ各地醫師ニ乏シカラス而シテ受験人ノ員數ハ年々歲々増加シテ十五年ニハ千百餘人ノ多キニ及ヒ遂ニ明治十六年醫師免許規則開業試験規則ノ發布アリテ年二回地方數ヶ所ニ試験場ヲ開キ内務省ヨリ地方ノ學士ヲ舉ケテ委員ヲ托シ主事ヲ派出シ各科ノ受持ヲ定メテ試験ヲ舉行スルコトナレリ十六年迄ハ試験ノ事モ省達ニテ發セラレ恰モ試験法ノ試験トモ云フ可キ有様ナリシカ此ニ至テ始メテ布告トナリ眞ノ國法トシテ制定セラレ本年又試験委員ハ内閣任命ノコトナリテ更ラニ一層ノ鄭重ヲ加ヘラレタリ此ノ改正迄ニハ凡ソ當初ヨリ三回ノ改正ヲ經タレモ其改正ノ屢々ナリシハ即チ

當時ノ情勢ニ應シタル事績ト見ル可キモノニ亦々醫學進步ノ速ナリシヲ證スルニ足レリ回顧スルニ八年始メテ試験法ノ行ナハレタル頃ハ千百年來父子師弟相傳ヘテ勝手ニ開業シ來リタル醫師ニ對シ陰陽五行ノ臆斷ヲ以テ方彙方函ヲ疾病ニアテハメタル醫師ニ向ヒ其子弟ハ今後簡易ナカラモ實理實測ノ學術ヲ標準トシテ試験スルヲナレハ或ハ流派ノ執着ニ由リ或ハ目下ノ不勝手等ヨリ噉々ト物議モ沸騰シ頗ル騒々敷事ナリシカ學問ノ眞理ハ辨論ノ争フ可カラサルヲニテ今ヤ醫學ノ大勢一定シテ復々撼カス可カラス我同業ノ後進子弟ハ岐路ニ迷フノ憂ナガル可シ

此他陸軍海軍其他各地ノ醫學發達ニ就テハ種々ノ沿革アリテ鴻業偉蹟ノ紀念トス可キモノ不尠又藥學ノ沿革モ大ニ醫學ト親密ナル關係ヲ有シ説ク可キトモ多クデレモ事繁ケレハ先今日ハ之ヲ略ス

以上前野、杉田ノ諸先生寶曆、明和ノ頃ヨリ備サニ辛苦艱難ヲ嘗メ蘭書解讀ノ緒ヲ開キ中頃松本先生長崎直傳習ノ盛舉ニ因リテ大ニ長足ノ進步ヲ爲シ遂ニ明治維新ノ盛運ニ際會シテ帝國大學陸海軍ノ醫事大ヒニ整頓シ遂ニ醫術開業試験ノ法律ヲモ發セラレ、ニ至リテ天下醫學ノ大勢確定シタリトノ概略ヲ三期ニ分ケテ之ヲ述ヘタリ而シテ第一期ハ年數凡ソ七八十年ニ涉リ第二期第三期ヲ合スルヨリ遙カニ多數ノ年所ヲ費ヒリ以テ第一期ノ辛苦艱難ハ其容易ナラサルヲ知ル可シ今本會ノ惣會ニ際シテ此事ヲ演ブルモ亦々古賢先哲ヲ欽仰敬慕スルノ念ニ出ツルモノナリ然レモ古賢先哲ノ辛苦艱難ハ實ニ容易ナラサルヲナレモ已ニ世界ニ現ハレタル事實ヲ異邦殊域ヨリ移シ來リテ我カ日本國內ニ入ル、ノ辛苦ニシテ言ハ、人事上ノ困難ナリ今ヤ其盡力ニ由テ既ニ其困難ニ打テ勝テ全國醫學ノ大勢已ニ定マリタル以上ハ今後我カ醫學社會ニ從事スル者ノ困難ハ最早内國ノ人事ニ非ラズ造物者ノ秘シテ世界ニ現ハサ、ルモノヲ其門戸ヲ排キ其奧妙ヲ探クルヲ以テ醫學發達ヲ進ムルノ事業ト爲ス可ケレバ容易ナル刻苦勉勵ヲ以テ

其目的ヲ果ス可シトハ思ハレス惟フニ本會ハ醫學社會中學者ノ萃ヲ拔テ組織セラレタルモノナレバ今日以後此發達ノ大任ヲ負荷スルモノハ本會ヲ措テ他ニ求ムル所ナカル可シ本會諸君ハ寶曆明和ノ古ニ遡リ再ヒ前野、杉田、宇田川、大槻等諸先生ノ辛苦艱難ヲ反復シテ造化ノ秘奧ヲ發キ我が東洋醫學ノ光輝ヲ世界萬國ニ發揚セララル、ハ余ノ信シテ疑ハサル所ナリ

右一篇ハ曾テ東京醫學會總會ニ於テ演說セル所ノ近世醫事沿革ノ概略ナリ今日本醫學會第一回總會學祖祭典ノ舉アルニ當リ蘭學事始再刊ノ事アリ依テ卷後ニ附シテ跋文ニ代フ

長與專齋謹識

明治廿三年四月一日印刷
四月八日出版

定價貳拾錢

東京市赤坂區赤坂仲ノ町十一番地寄留

山口縣士族

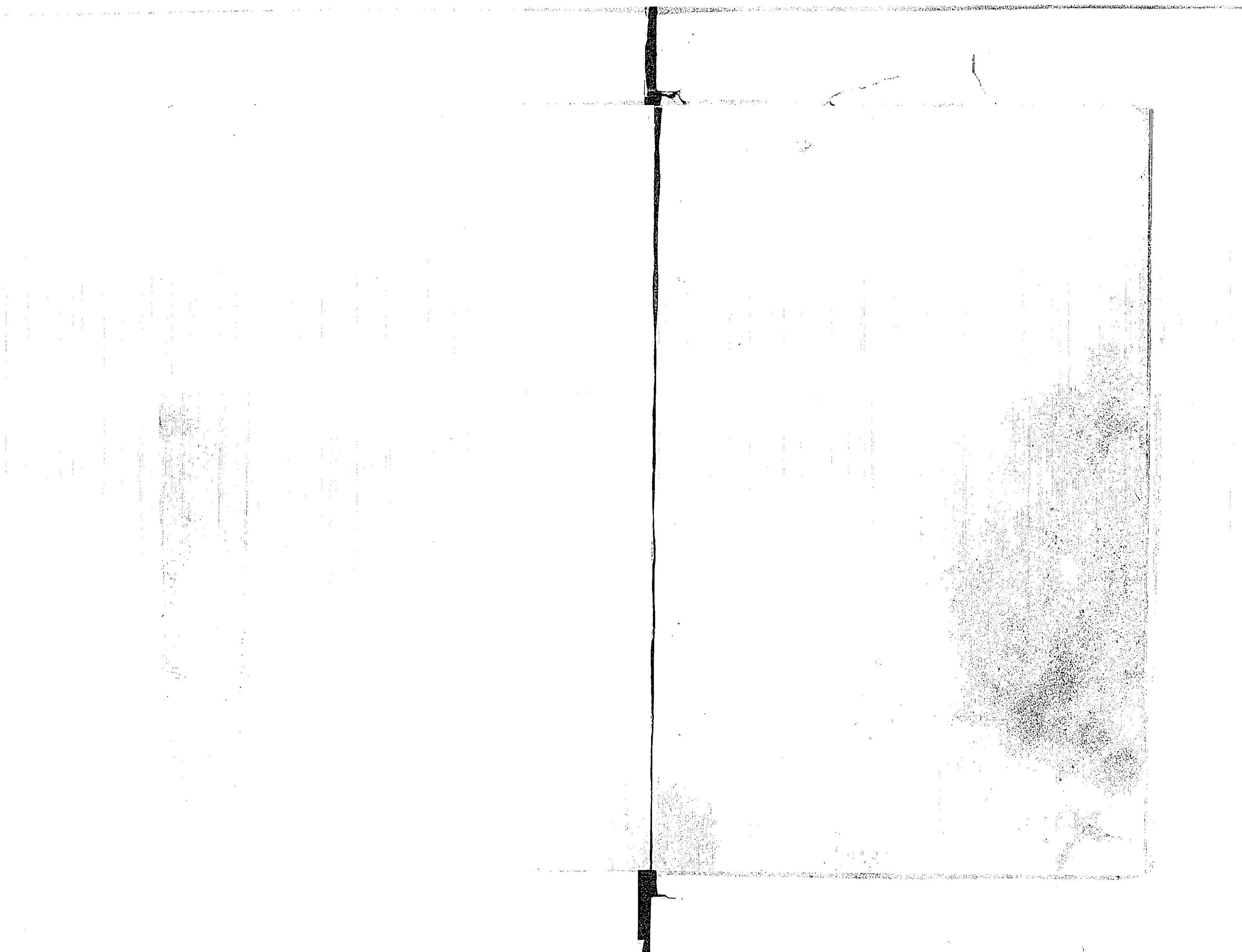
編輯者 兼 發行

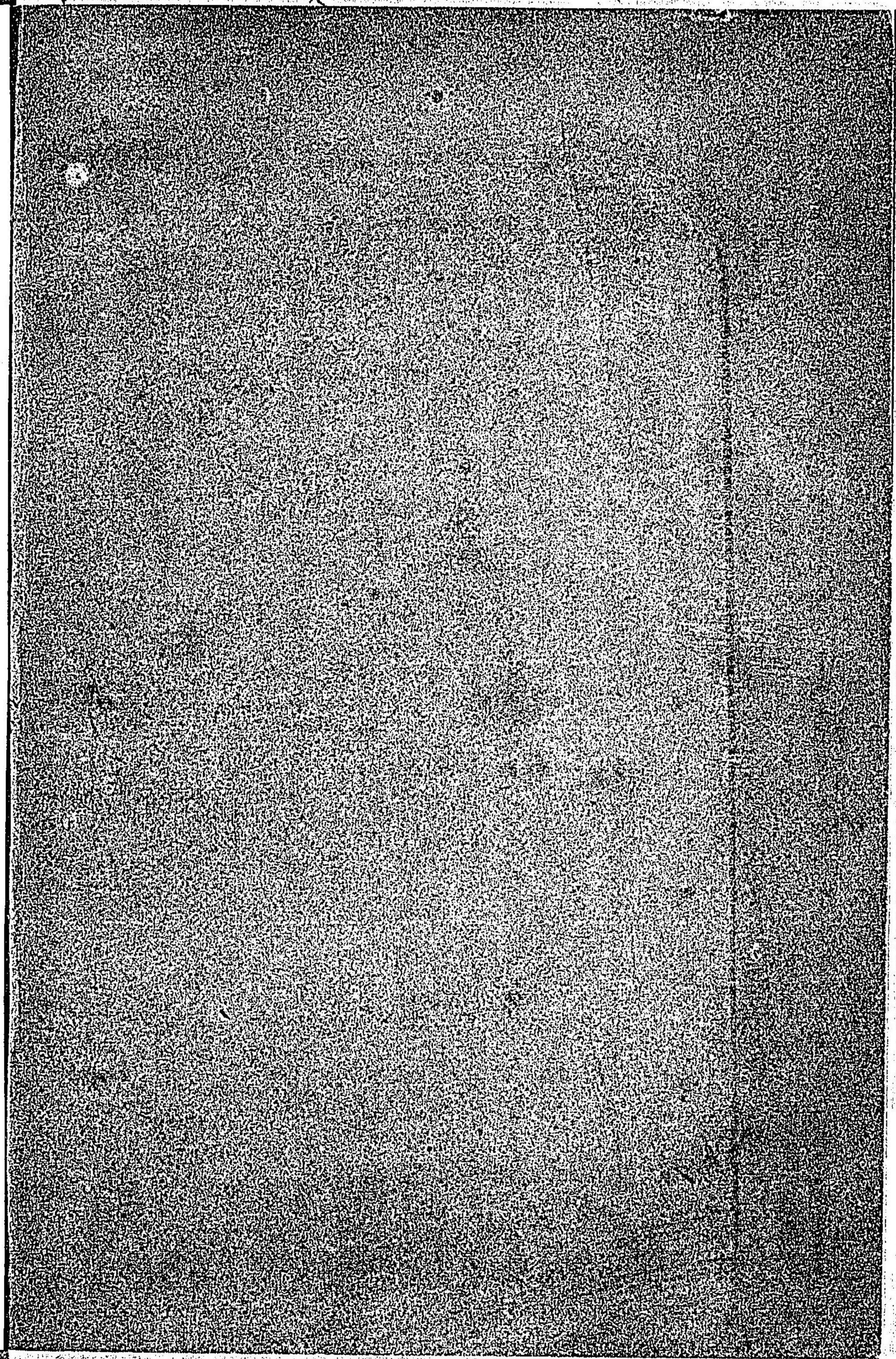
林 茂 香

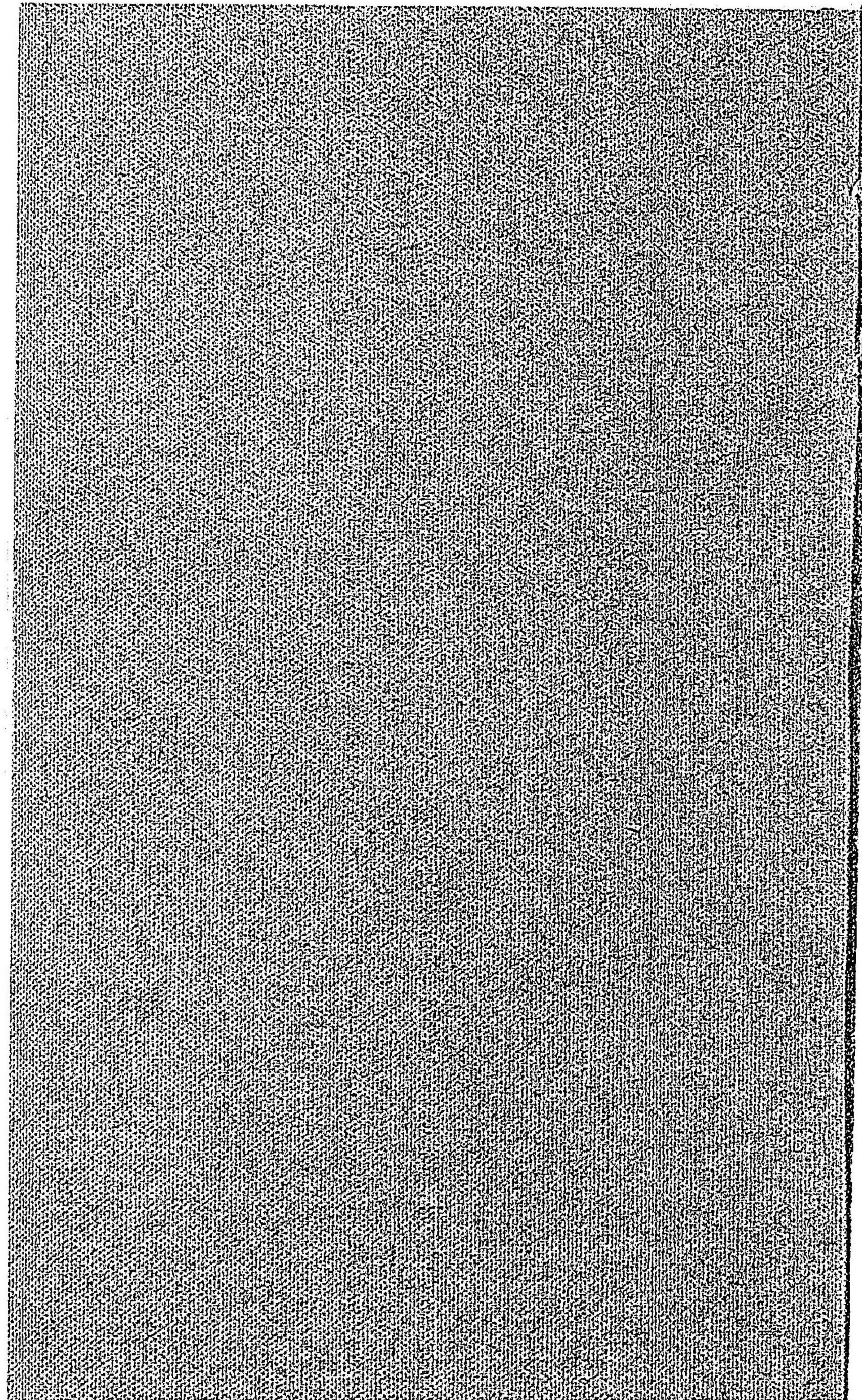
東京市京橋區八官町十九番地
東京府平民

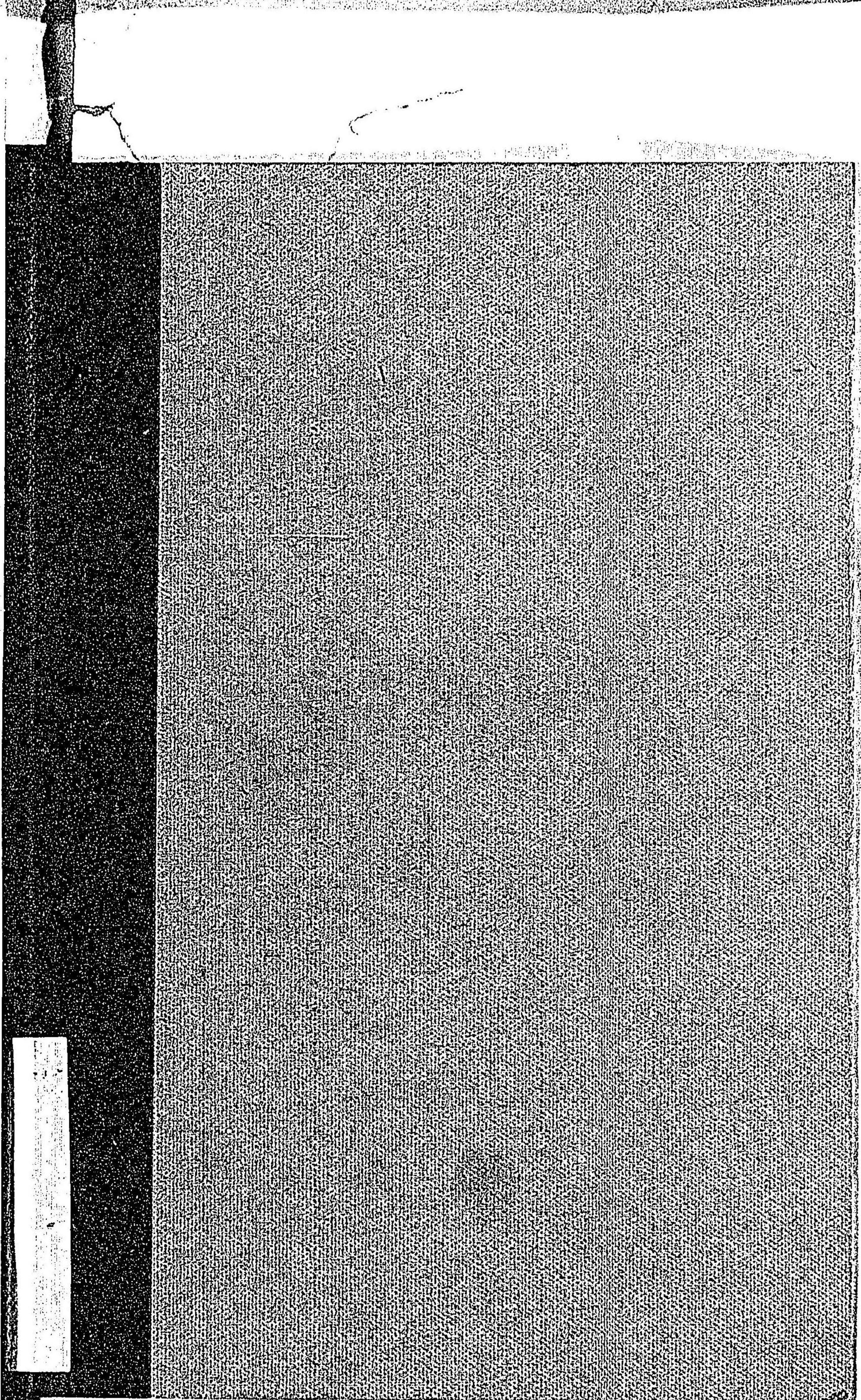
印刷者

吉 村 多 吉









1111

特47

268

蘭學事始

国立国会図書館

052923-000-5

特47-268

蘭学事始

杉田 玄白 / 著

M23

CAA-0287



